

---

# サムライHUNTER

N I S I O I S I N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サムライHUNTER

### 【Nコード】

N2698V

### 【作者名】

NISIOISIN

### 【あらすじ】

若くして死んでしまった俺は神の力でHUNTERXHUNTERの世界へ転生する事になった。

よし原作知識で死亡フラグを回避だ！……………記憶が消されてるだ  
と！？

主人公設定  
(前書き)

ネタバレあり

## 主人公設定

名前：ムサシ

性別：男

出身：ジャポン

年齢：15歳（287回ハンター試験時）

系統：特質系能力者

特技：剣術

能力：右手に剣を左手に盾を

追爪する五つの印

鬼努私落

### 【能力解説】

？右手に剣を左手に盾を（ナイト・オブ・オーナー）

具現化系能力

剣と盾を具現化する事ができる

最大で剣は13本、盾は1つ具現化可能

大きさよりも強度を優先しているため大きさは3M辺りが限界  
盾には自動防御の能力がある

『制約と誓約』

具現化した剣の数が1本・形状が日本刀である時のみ、オーラ又は

人間以外のオーラを纏っているものは何でも斬れる能力が付く  
『応用・派生』

？ 剣の雨 （ブレイドシャワー）  
操作系を加えた応用

具現化した剣を操作して相手に飛ばすのが主な使用方法

？ 剣の風 （ブレイドソニック）

放出系を加えた応用

剣に纏わせたオーラを相手に飛ばす

相性の問題で威力は低いがスピードのある攻撃

？ 剣の炎 （ブレイドライジング）

強化系を加えた応用

具現化した剣を強化するが相性がもつとも低いため効果は弱い

？ 追爪する五つの印 （ストーキングマニキュア）

特質系能力

印をつけた所へ瞬間移動する能力

『印をつける手順』

？ 右手で対象に触れる

？ 触れた状態で「チエック」番」と言う

？ 自分の右手の爪に唱えた番号が刻まれる

？ 相手にも見えない印が刻まれる

『制約と誓約』

触れる対象は生物でなければならない

印は右手の爪の数までしか刻むことが出来ない

一度印を刻んだら、対象が死ぬか印の刻まれた自分の爪を剥がすかでないと印は消せない

1日に5度までしか使用できない

1度目の使用から24時間経過でリセットされる

除念で外すことは可能

？鬼努私落（フォー・オブ・ペルソナ）

特質系能力

自分の中に「鬼」「努」「私」「落」の人格を形成する能力

？鬼の人格

ヒソカに匹敵する殺人鬼の人格

一人称は「オレ様」

人を殺すことに躊躇いを覚えていたムサシが、それでもこの世界で生きていくために躊躇なく人を殺す為に作った人格

転生者であるため元々が一般人のムサシには必須だった

殺人に躊躇いが無くなることで大幅に戦闘能力が向上する

この人格の時のみ念能力

ブレイドハッピーエンド  
『斬斬舞舞』を発現

？怒の人格

激しい怒りを司る人格

一人称は「オレ」

性格は狂暴ではなく、むしろ冷静で穏やかな性格（スーパーサイヤ人のような感じ）

この人格の時には強化系能力者になる

？私の人格

元々のムサシの人格

一人称は「俺」

元々のムサシの人格をベースにして造られた人格

4つの人格の中での主人格的存在で、この人格が他の人格に知識を与える権利と知識読み取る権利を持つ

？落の人格

冷静沈着な落ち着きとかなりの集中力を持った人格

一人称は「僕」

この人格の時には具現化・操作の能力精度が上昇したり円の大きさが広がる

『制約と誓約』

他人格の間では記憶の共有ができない

つまり、ある人格が表れている時は他の人格は眠っている状態にある（知識の共有は条件付きで可能）

『応用・派生』

パラサイトマインド

？寄生人格

特質系能力

生物に対して鬼・怒・落の人格を寄生させる能力。

私の人格の時に、絶の状態の相手に触れることが条件。

寄生させられた相手は、記憶・知識・思考・感情の全てが、私の人格に筒抜けとなる。

また、寄生させていた人間が死んだ時、寄生していた人格が身体の主導権を得ることが出来る。

### 【詳細】

原作知識を持った転生者（G Iに入るまで）

ジャポンの伝統的な武士の家系に生まれた為、かなり幼い頃から鍛錬をしてきた

それ故、念なしでも相当強い人間に部類される

絶や隠は得意だが円は苦手です。10mが限界だが、それを補う直感の良さがある

容姿はBLEACHの朽木白夜（過去編）

## 転生開始　そして異世界へ

いつも通り剣道の朝練の時間に起床した俺は、自分が何もない真っ白な空間で目覚めたことに気づいた

「何だこれ……夢なのか？」

「いや、夢じゃないぞ」

咄嗟に声のした後ろを振り向く

其処には、白い服を着た青年がいた

「お前、誰だよ」

「神だよ」

「はあ？」

どうやら俺は相当頭の悪い夢を見ているようだ  
だいたい、こんなチンピラみたいな神様がいる訳がない

「誰がチンピラだよ。後、これは夢じゃないぜ」

「お前のことに決まってるだろ」

……………あれ？俺、声に出してたっけ？

「いいや。俺がお前の心を読んだだけだよ。神様にはそれくらい見  
戲同然だぜ」



……おいおい。マジで神なのかよ

「それじゃあ、神様が俺に何の用だよ」

「いや、地球でお前が死んだから別の世界に転生させようとな」

「は？俺が死んだ？何でだよ！そんな記憶ねえぞ！！」

「まあ、殺したの俺だからな。最近はさ、転生できる地球人がなかなか死なないからさ」

「ふざけてんのか！」

「まあまあ。お詫びにお前の好きな”ハンターハンター”の世界だからさ」

ふむ……ハンターハンターの世界か。悪くないな

「よし！それならいいや。それでどんなチート能力をくれるんだ？」

「はあ？あげるわけないだろ。面白くない」

「なっ……！！それじゃあどうやって死亡フラグを回避するんだよー！」

「しなくていい。ついでにその死亡フラグに関する記憶も消しとくからな。頑張れよ」

「こら！待て！！」

叫びも虚しく、再び俺の意識は遠ざかっていくのだった

## IN異世界　そして原作へ

――転生してから15年――

俺はこの世界で生きていけるようにひたすら己の肉体を鍛えてきた  
運良く剣術を代々伝える事を生業としている家に生まれたおかげで  
好条件の才能と環境を手に入れていた

さすがに念までは教えてくれなかったなのでそこは我流で鍛えていた  
取り敢えず精孔を開いて、四五行をマスターして、水見式で自分の  
系統を知るまで1年かかった

水見式の結果では俺の系統は特質系だった

俺としてはウヴォーギンみたいな強化系が良かったんだがな  
まあ、少しでもレアな能力になる事を祈っていた

そんな感じで転生してからの15年を過ごして来た

そして俺は今、多くのハンター試験受験者が集っている地下水道にいる

ノブナガみたいな和服に刀1本だけという身軽な格好だ  
一応腰に差しているのは普通の刀だ

普通と言ってもいわゆる伝家の宝刀というやつらしい

ムラマサとでも名付けてやろうかな

——さて、原作への介入を開始するとしてよう

## 原作介入　そして邂逅へ

さて、俺の試験番号が330番だ

確かゴン達が400番ぐらいだったかな？

だとしたらもう少しこんな場所で待たなければならないという事だ

暇だなあ、なんて思っていると人が近づいて来るのを感じた

そちらの方を向いてみると予想通りの人物がいた

16番の番号プレートを付けた小柄なおっさん

気のよさそうな笑みを浮かべているが、1度でもハンター試験を受験したことのある奴なら誰でも知っている

――”新人つぶし”のトンパ

「君、新顔だね。オレはトンパ、よろしく」

そう言っただけで差し出された手と、取り敢えずは握手を交わしてこちらからもよろしくと言っておく

そしてトンパは聞きもしないのに自分の知る要注意人物の情報を与えてきた

ここら辺はまだ原作知識が残っていたからあまり興味が無かった為、こっぴどく油断させるんだなあなんて考えながら話を聞き流していた

「ところで、のど乾いただろ。ジュース飲まないか？」

「侍の習性でな。人からもらった飲食物は喉を通らねーんだ」

某忍者さんのセリフを少し貸してもらった

トンパは侍なんて知らないだろうに納得して退いていった

いや、納得したのではなくビビったのかな

少し真面目にやり過ぎたかな？目とか

これ以上は何も起こらないだろうと思ったところで、予想に反して  
まだ声をかけてくる奴がいた

そいつの姿を見て俺はめんどくさくなりそうだなと思った

俺に声をかけてきたのは件の自己主張の激しい忍者ハンゾーだった

「なあなあ、お前もしかしてジャポンの出身か？その格好って侍だよな！奇遇だな、オレもジャポンの出身で忍者をやってるんだよ。  
有るものが欲しくてハンターになりたくてな」

ハンゾーの欲しい物って「隠者の書」だったかな？

確か一般庶民には入れない国にあるらしいというやつだ

忍者なんだから盗むのは簡単なはずなのにな

「それじゃあ試験では手は抜かねえがお互いがんばろうぜ」

そう言ってハンゾーは消えていった

あいつ、自分だけベラベラと喋るだけ喋ってただけじゃねえか

暇だったとはいえ貴重な時間を潰されてしまった

もうゴン達が来てるかもしれない。

探してみようかと思った所で

シリシリシリシリシリシリシリシリシリシリ

ハンター試験受付け終了の合図になった

「では、これよりハンター試験を開始いたします」

「まずいな」

仕方がないのでゴン達との接触を諦めてできるだけ先頭へ向かう

試験官であるサトツに初めは歩いてついて行っていた受験者達もサトツのスピードに走らざるをえなくなってくる  
全員が走り出し、誰もがおかしいと思った所でサトツが一次試験について説明を始めた

「二次試験会場まで私について来ること。これが一次試験でございます」

確か100km近く走らされるんだっただかな

取り敢えずサトツのすぐ後ろを走らしてもらおう

いずれゴンとキルアが来るだろうから

その時、第1の目的をはたすでしょう



階段を上り初めて少ししてからゴンとキルアが先頭の俺に追いついて来た

ほとんど疲れている様子がないのは流石かな  
そして後ろで試験が簡単だとキルアが言ったところで俺も話しに混ざることにした

「まだ子供のくせにたいした余裕だな」

「む、アンタこそオレ達と対して変わらないんじゃないの？」

「ああ、俺は15だぜ」

「やっぱり。たったの4つしか変わらないじゃん」

「まあね。取り敢えず自己紹介しようや。俺はムサシっつー名前だ」

「……………オレ、キルア」

「オレはゴン！よろしく！」

「おう！よろしくな」

そう言って俺はゴンの肩に右手を置き言葉を唱える

「  
———— チェック壱番」

すると、俺の右手の親指の爪に漢数字の壱が刻まれる  
他の爪にも弐から伍までの漢数字が刻まれていた

「何かした？」

「うん？何もしてないぜ。それより出口だ」

勘のよさで気づかれたが分かってないから良いだろう  
キルアもこっちをジッと見ていたので慌てて話を逸らす

次はあの湿原

ヒソカが少し暴れるな

——少し、遊んでみようかな

## 一触即発　そして殺戮へ

やっと地下を抜けて一次試験が終了した……と思ったら

今度は果ての見えない上に危険な動物がたくさんのもうメーレ湿原、通称”詐欺師の埒”を通って行かないといけない

俺は知っていたけど知らなかったら心が折れちゃいそうだな

そして早速、この湿原が危険性を猿さんがデモンストレーションしてヒソカに殺されてくれたおかげで受験者全員が改めてヒソカの恐ろしさを再確認することができた

こんな湿原よりもヒソカの方が何十倍怖いよな

そうして俺達は再び走り始めた

さっきまでの地下道とは違って地面がぬかるんでいるし霧まで出てくるからかなり難易度が上がっている

それでも先頭のゴン達と一緒に行けない訳でもないが、敢えて俺はレオリオとクラピカの辺りを走っていた

何故かというヒソカと闘うためだ

確かにアイツは恐ろしい快樂殺人鬼だが、この先を生きていくためには実戦的経験が必要だ

残念ながらこのハンター試験でちゃんと経験値になりそうなのはアイツとハンゾーくらいだからな

念さえ使わなければ成長の余地があると見て、ここで殺そうとはしないはず……………たぶん  
そして一段と霧が濃くなりだして周りの人間が湿原の生物に襲われてパニックになりだした時

——  
ヒソカが動いた

いくつものトランプが受験者に飛来する  
もちろん、只のトランプではない  
オーラを物体に纏わせる”周”が使われている為、それだけで周りの受験者は死んでいく  
しかもその理由が、タルイから選考作業を手伝ってあげよう、ときたそれに我慢出来なくなった受験者がヒソカを取り囲むも、敢え無くトランプ1枚で殺された

残ったのは俺、レオリオ、クラピカの3人

「残りは君達3人だけ？」

そう言っただけヒソカはゆっくりと俺達に近づいて来る  
アイツが近づく毎に空気が無くなっている様に感じるぐらい濃密な殺気が発せられている

「やられっぱなしでガマンできるほど……………氣イ長くなーんだよ！」

「レオリオ!？」

レオリオが叫びながらヒソカに殴りかかるも、あっさりと避けられて背後を取られる

そこへ、ゴンの釣り竿がヒソカの顔面目掛けて飛んできてクリーンヒットする

だがヒソカは何ともないかの様にゴンの方を振り向く

「やるねボウヤ? 釣り竿? おもしろい武器だね?」

「てめエの相手はオレだ!!」

レオリオを無視してゴンに向かおうとしたヒソカを襲うレオリオを制するように俺が前に出てヒソカに斬りかかる

「おっと危ない?」

それは避けられるが、ヒソカが離れた隙に俺はゴン達に集まるように指示する

「ゴン達は先に行っていてくれ。俺がヒソカを足止めする」

「ムサシ、でもヒソカは!!」

「分かっている。俺は大丈夫だから、後の2人も先に行ってくれ」

「……分かった。感謝する、ムサシとやら」

「クラピカ!？」

「行くぞゴン、レオリオ」

そしてゴン達3人はこの場を離れて行った

ゴンならレオリオの香水のニオイがなくても人間が密集しているニオイぐらい嗅ぎ当てるだろう

ゴン達が去るまで待つていてくれたヒソカに声をかける

「待つていてくれてありがとう」

「うん？彼らは合格だしね？」

そう言つてヒソカはトランプを構えて俺1人にだけ殺氣を向けてくる

「さあ、始めようか？」

挨拶代わりのトランプが俺を目掛けて飛んでくる

それを刀で弾かず、敢えて前に突っ込み紙一重で避けてヒソカとの距離をつめる

「わお？素晴らしいね？」

ヒソカは高速で近づく俺を止めようとはせずに待ち構えていた

「はあっ！..!」

間合いに入った瞬間、刀を抜きヒソカの首を狙って振るうもランプでガードされる

すぐに刀を戻し、再びヒソカに振るい、防がれる

これが僅か数秒の間に何十回と繰り返される

俺が念を使わないからか、ヒソカも使っているのはランプへの周だけで肉体を強化する”堅”すらに使ってはいない様だった

お互いに念を使わない状態ならば俺の方に分があるらしく、だんだんヒソカの防御がギリギリになって来た  
内心、もしかしたらいけるかもしれないと思った俺はヒソカの顔を見て硬直してしまう

笑ってやがる

「隙だらけだよ？」

「くっ!!」

ヒソカの邪悪な笑みに動きを止めてしまった俺をヒソカが見逃すはずがなく、ランプで斬りつけてくる

固まっていた俺はよけが遅れてしまい頬を浅く斬られる

ヒソカの高度な周を施されたランプの切れ味をこの身で味わうことになった

「ほらほら？どんどんいくよ？」



先程までと立場が逆転して俺が完全に防御へまわっていた  
ヒソカのスピードが上がっている訳ではない

ヒソカの笑みが頭から離れない、俺の動きのキレが落ちているのだ  
どうやら俺は本当の”死合い”とやらをなめていたようだ  
分かってはいたが、自分の弱さを痛感させられる闘いとなってしまう  
った

「はい、お終い？」

やはり、俺は負けた

決め手は右肩を斬られて刀を落としてしまったことだ

「くくっ？落ち込む必要はないよ？純粋な身体能力だけならキミの

方が上だよ？まあ、経験の足りないボウヤだけだね？」

そう言ってヒソカは携帯で誰かと（恐らくイルミだろう）話しだした

「OKすぐ行く？」

携帯を仕舞うとヒソカは俺に近づいて来る

「じゃ、一緒に行こうか？」

「……………いいのか？」

「うん？キミをここで脱落させるより先に進まれた方が美味しく育ちそうだ？」

「……………分かった。ありがとう」

俺は傷の応急処置を済ましてヒソカの横に並び、二次試験会場へと向かった

一触即発　そして殺戮へ（後書き）

ムサシは念なしならこの世界でもトップクラスの設定です

## 試験失格　そして復活へ

襲いかかってくる動物からヒソカに守られながら二次試験会場へと歩を進めていた

意外と右肩の傷が深かった為、右手で刀を振るうことができないので障害の対処は全てヒソカに任せていた  
左手を使えばいいのだがあまり手の内を見せたくないからね

「……それにしてもさ。成長するかもしれないってだけでここまで助けてくれるの？」

これは疑問に思っていたことだ  
原作ではゴンにここまで直接手を貸したりしなかった

「気になるかい？何故かというと、キミからはボクと同じニオイがするからさ？」

——有り得ない

「……自慢じゃないけど俺は人を殺したことは無いよ」

そうだ。まだ俺に人を殺す事ができた試しはない、”俺”には

「だろうね？だけどボクには分かるよ？キミの中にはステキなものが眠っているってね？」

——だから、

「それを起こしてあげなきゃ？」

…………… 本当に見抜かれているみたいだ

キラア相手には誤魔化すことができたが、ヒソカには隠し通すのは無理だったか

まあいいさ。この試験で”アイツ”の出番はない

そうして俺達は湿原を抜けて二次試験会場へと到着した

「くっくくく？じゃあね？」

そう言つてヒソカは俺から離れて人混みへと向かつていった  
………… お礼を言い損ねちまったな

そして取りあえずゴン達を探そうとした時、建物の扉が開き巨大な  
男と女が姿を現した

「さあ、二次試験は料理よ！」

女の方…… 美食ハンターのメンチが宣言した

ルールを詳しく説明すると、2人が指定する料理を作り「おいしい」  
と言わせれば良いらしい

そして、大柄の美食ハンターブハラが指定したメニューは豚の丸焼  
きだった

そうして二次試験がスタートし、受験者は一斉に森へと豚を探しに  
行った

そしてたいした時間もかからずに前半戦は終了した  
半分近くが落ちてしまったが、それでも例年に比べるとかなり優秀  
な方らしい

しかし、ここからが本当の地獄だって事をコイツらは分かっているんだよな

「二次試験後半、あたしのメニューはスシよ!!」

受験者のほぼ全員がスシが分からずに困惑していた  
一応ヒントとして料理するための道具やゴハンを用意しているとはいえかなりの難題だよな

「それじゃ、スタートよ!」

結果から言つとこの試験を合格できる者はいない  
ハンゾーのせいで作り方がバレるはメンチを怒らせるはで試験の審査規定が狂ってしまうのだ  
もちろん、それを知っていても生まれてこの方料理などしないことのない俺にメンチを満足させるだけのスシが作れるはずがない

よって、原作通りネテロが来て新しい審査を提案するまで少し休ませてもらう

ヒソカとの戦いは予想以上に精神的に疲れたからな

そして、賞金首ハンター志望のトードーさんが宙を舞った辺りでやつとネテロ会長が参上した  
しかし空から降って来るってのは思ったよりもインパクトのある登場の仕方だな

ネテロ会長がメンチを諭したことで新たな審査として今度はゆで卵がメニューとなった

そして俺達はメンチの指定した山へと向かうため飛行船に乗り込んだ

そうして行われた再二次試験をクリアして俺は無事に三次試験へとコマを進めた

……………そう言えばゴン達に姿を見せてないけど。大丈夫かな？





## 蒼空旅行　そして玉盗へ

二次試験をクリアした俺達は三次試験会場へと協会の飛行船で向かっていった。

ネテロ会長から残った受験者42名に改めて自己紹介が行われている。

本当は俺を含めて43名の合格者が出るはずだったが、二次試験である人物に退場してもらった。

——トンパのことだ。

彼には悪いが峰打ちで二次試験中気絶させておいたので失格となっていた。

まあ三次試験での奴の代わりは俺に任せてもらおう。

さて、自由時間にもなったしゴン達に俺の無事を知らせておこうかな。

すぐに探さなかったのが悪かったのか。

見つかったのはクラピカとレオリオだけで既にゴンはキルアと探検に出かけた後だった。

……心配されてないかなあー、ってのは自惚れだったかな。  
一応あの2人にも声かけとこうか。

「よお、403番に404番」

「君は……ムサシ！無事だったのか！？」

「えっ！？ヒソカと一緒に残った奴か！生きてたのかよ！！」

「まあ、ご覧の有様だけどね」

そう言っただけ俺は治りきっていない右肩を見せた。

「……本当にすまない。私たちのために……」

「いや、気にしないでいいよ。それじゃあ俺はゴンを探しに行くか

ら、またね!」

2人と別れて俺は再びゴン探しを開始した。

ゴンを探して走り回っていた俺は、突如前方から殺気が溢れてくるのを感じた。

最初はヒソカがまたやっちゃったかと思ったけど、冷静になって思い返してみると心当たりのある出来事を思い出した。

ええいままよと殺気の方に近づくと、やはりソコにはキルアと哀れな死体が2つあった。

ネテロとのやり取りで感情が高ぶっているからか俺に気づいてないかのように近づいて来て、俺にまで肉体操作で変化している右手を心臓目掛けて突いてきた。

流石に殺されたくはないので、とんでもない速さの右手を掴み取る。

「おいおい、危ないだろ」

「……………あれ？確かアンタ……………」

「ムサシだよ。もう忘れちゃったのか？キルア」

「ああ…………。へえー、あの状態のオレの攻撃を止めるなんてやるじゃん。」

「何がやるじゃんだ。お前といいヒソカといい、少しは自重しろよ」

「悪い悪い。もう落ち着いたから。じゃあな」

「おう！……………って死体ちゃんと処理してけよ！」

俺の叫びも空しく聞こえない振りをされて逃げられた。

「まったく……………俺も知ーらね！」

誰かに見つかる前に急いでこの場を離れることにした。

「お！やっと見つけたぜ」

探し始めてから少し時間がかかったがなんとかネテロとボール盗りの真っ最中のゴンを見つけることができた。  
まあしかし、ゴンは良いように弄ばれている。  
ネテロも存外大人気ないよね。

……少し俺もイタズラしたくなってきたな。

能力が1つバレるかもしれないがネテロにバレても大したリスクにはならないだろう。  
むしろ、ネテロが俺の能力を過大評価してくれればこの先有利になりそうな予感がする。

という訳で、まずネテロ達に近づき俺の存在を気づかせる。  
その後、この場を離れる振りをしてゴン達を目視できるギリギリの距離をとる。

そしてゴンがネテロに頭突きをかまそうと飛び込みネテロがよけようとした瞬間、俺の能力『追爪する五つの印』ストーリーキングマニキュアを発動。

「ジャンプ、壱番」

言葉を唱えると、俺の身体は一瞬でゴンの元へ跳ぶ。

この場を離れたはずの俺が突然現れたことに驚く隙すら与えずにネテロからボールを奪い取る。

ゴンは壁にぶつかった拍子で気を失ってしまったようだな。

「乱入しちゃってすいません。ネテロ会長」

「おぬし……今は能力かの？まったく姿が見えなかったぞよ」

「ええ、その通りですよ。なかなか凄い能力でしょう？」

「ふむ……強化系の超高速移動、または条件付きの瞬間移動といったところかのオ」

今のだけでここまで分かるのは流石かな？

ほとんど正解のようなものだしね。

「さあどうでしょう？取りあえずゴンはもらっていきますよ」

「うむ、友達かの？目が覚めたらワシも楽しかったぞと伝えてくれるかの？」

「OKですよ。それじゃあおやすみなさい」

ゴンを抱えてどこか安全に眠れる場所を探すことにした。

「ふむ……あやつめ、相当な手練れじゃのオ。このワシですら底か測れないほどの絶じゃった。あの若さであれば将来が楽しみだぞよ。ほっほっほっほっ」





## 蒼空旅行　そして玉盗へ（後書き）

主人公設定に新しい能力について更新しておきます

### 三次試験 そして孤島へ

心身ともに多大な疲労を負った激闘の1日の翌朝。

飛行船で一夜を過ごしたことで受験者達の表情にはある程度の活気が戻っていた。

だがそれ以上にこれからの試験への不安に顔を曇らせている人数の方が多いようだ。

何故かというところ、俺達は飛行船から雲をも突き抜けている塔のテッペンに降ろされたからだ。

そして目の前の人間どうか怪しい丸顔から三次試験の説明がされる。

「ここ、トリックタワーと呼ばれる塔のテッペンが三次試験のスタート地点になります。試験内容は、72時間以内にこの塔を生きて下まで降りることです」

説明だけすると、丸顔は飛行船に乗って帰っていった。

残された受験者達は入り口の見当たらぬこの塔をどうやって降りていくか悩んでいた。

側面の壁をロッククライミングの要領で降りようとした受験者がいたが、野鳥のエサとなった。

そして、どこかに下へ続く隠し扉があると結論づけて全員が探し始めた。

俺はどうしたかというところ、ゴン達が使った隠し扉の周辺を探っているのだが中々見つからない。

30分ぐらい時間をかけてやっと見つけた。

だが、ここが本当にゴン達の落ちた部屋につながっているとは限らないからな！。

能力を使えば確実だけど説明が面倒くさいので、取りあえずは自分の運にかけることにした。

高さもないのでキレイに着地をする。

「あ！ムサシだ！！」

「おお！もつと待つかと思ったけどラッキーだぜ」

「あれ？ゴン達ってもつと先に降りてなかったか？」

「それに関しては私から説明しよう」

クラピカから”多数決の道”についての説明を聞いて腕にタイマーをはめると、壁の一部に扉が現れた。

「なるほど。5人そろってタイマーをはめるとドアが出現する仕組みか」

「それじゃ、早く進もうぜ」

途中で か×の質問を受けながら、順調に進んでいく。

「そういえば、まだ名前を覚えてなかったな。私の名はクラピカだ」

「オレはレオリオだ。ムサシつつたか、変わった服におかしな剣だがこの出身なんだ？」

「あ！そういえばカイトも似ている剣を持ってた！！」

「俺はジャポンつつー小さな島国の出だよ。それに、これは日本刀っていうやつだ。切れ味はとんでもないぜ」

他愛のない話しを続けていると、道が途切れている空間に出た。

「見ろよ」

キルアの言う通りに向かい側を見ると、フードを被り手錠をつけた5人の人間がいた。

その内の1人がフードと手錠をとり、こちらに向けて叫びだした。

「我々は審査委員会に雇われた”試験官”である。お前達は我々5人と一対一で戦い、3勝しなければ先に進めない。ちなみに戦い方は自由だ！こちらの一番手はオレだ、そちらも選ばれよ！」

「ここはどうするのがベストか……………」

「どうするよ?」

「戦い方は自由ということは何でもアリだということだ。慎重にいくべきだろう」

「なら、俺がいくよ」

「まあ…………ムサシなら問題ないかもね。相当強いみたいだし」

他の3人もキルア同様に賛成してくれた。

細っこい石橋を渡って中央のステージへ向かう。

そして試練官と正面から向かい合う。

「さて、オレは勝負方法にデスマッチを提案する。負けを認めるか死ぬまで戦う!」

「いいよ。早く始めようか」

「その若さで見事な覚悟だ。それでは……………勝負!」

試練官が低い姿勢で突っ込んでくる。

さて、どう対処するか。

殺すのが一番楽だがまだ俺は殺すことへの怖さを克服仕切っていない。

気絶では原作みたいに時間を稼がれるかもしれない。

どうにかして戦意を喪失させなければならんだよなあ。

何て事を考えている内に試験官を俺の目前に迫っていた。  
試験官の両腕が俺を掴もうと振るわれる。

しかし、俺の身体は一瞬で試験官の目前から消え去り、逆に背後を  
とり刀を首筋に突きつけていた。

全てが無意識の内の行動だ。  
一生懸命に対処方法を考えていた時間を返して欲しい。

「……………降参する？」

「くっ……………まいった」

あっさりと降参してくれたことに心の中でガッツポーズ。  
もしここで粘られたら、少し物騒な手段をとることになっていたか  
らな。

「まずは1勝だな。次は誰がいく？」

「オレが行くよ！」

「よし、それじゃあ任したぜゴン！」

ゴンの対戦相手は見るからに戦闘派ではなく、実際に提案してきた  
ルールも”同時にローソクに火をつけて先に火が消えた方の負け”

というものだった。

「では、どちらのローソクがいいか ×で決めてくれ」

試験官の手には長いローソクと普通のローソクの2つが握られていた。

「長い方にはきつと仕掛けがあるに違いねーぜ！」

「いや、その裏をかいて短い方に仕掛けがあるかも」

まあ、本当はどちらも罠なんだけどね。

それで結局ゴンの野生のカンにかけることになった。

カン……っっていうか罠とかを何も考えてないだけだな。

そして後は原作通り。

ゴンのローソクは火の勢いが強くてあつという間に燃え尽きそうになったが、相手のローソクに直接息を吹きかけてゲームはゴンが勝った。

「よし、これであと1勝だぜ！」

「そうだね。じゃ、任せたよキルア」

「はあ！？ここはクラブピカだろ！！」

レオリオはキルアのことほとんど知らないからなあ。

そう思うのも仕方ないけど、正直あのイベントに付き合っるのは手間なんだよね。



それにキルアも少しカチンと来てるみたいだし。

「いいじゃないかレオリオ。彼もここまで勝ち残ってきた実力者なんだ」

「むう……………任せたぞ、キルア」

「うん。瞬殺してくる」

宣言通りキルアが見かけ倒し野郎を瞬殺して俺達は再び先に進み始めた。

そして、いくつもの多数決をこなしていき、とうとう”最後の別れ道”へと辿り着いた。

課題は2人でスタート地点に戻る の道か、3人ですぐにゴールできる×の道を選ぶかというものだった。

「……さて、先に言っておくが俺は――」

「あー……ごめん、レオリオ。少し離れといて」

「おい、何をする気だ？」

「いいから、いいから」

そう言ってみんなを後ろに下がらせて俺1人が扉の前に立つ。  
そして一息に鞘から刃を走らせ、扉を斬り裂いた。  
後ろでみんなが啞然としているのが見なくても伝わる。

「おいおい、日本刀ってのはこんなにすげえのか？」

「もちのろん。言っただろ？切れ味はとんでもないって」

オーラで少し強化していたのはナイショだ。

「それじゃ、行こうよー！」

ゴンに続いて、俺達は出口を目指して行った。

「諸君、タワー脱出おめでとう。四次試験はゼビル島で行われる。では早速、クジを引いてもらう。これで、狩る者と狩られる者を決定させてもらう」

引いたカードの番号の受験者のナンバープレートが高ポイントになるんだっただよな。

さて、俺のターゲットは誰だろうか。

4  
4

な……ん……だど？



## 狩猟終了　そして最終へ

俺達は今、四次試験の舞台であるゼビル島へと向かう船に乗っている。

ちなみに受験者の空気は最悪だ。

誰が自分を狩る者なのか？って疑問から疑心暗鬼に陥っているからだね。

ん？俺はどうなのかって？

それはもう、絶賛大後悔中ですよ。

ヒソカがターゲットになるくらいならトンパさん残らしとけば良かった……。

てゆうかこのままだと俺がヒソカと原作みたいに”一発ぶち込むま  
でプレートは預ける”をやらなければならなくなる。

そんなのは絶対にゴメンなので開き直ってプレートを3枚集めるこ  
とにしよう。

？

？

？

？

そして、船がゼビル島に到着した。

船を降りるのは三次試験を早くクリアした順番になるので、俺の番までは少し時間があった。

その時間を利用して、俺は情報を集めていた。

手に入れた情報は3つ。

1つ目はクラピカのターゲットは384番。

2つ目はゴンのターゲットは191番。

3つ目はレオリオとキルアは原作通り。

割と信用を得ていたのかあっさりと教えてくれた。

これだけの情報が集まれば、なんとか筋書きを作り上げることができそうだ。

やってやる……………やってやるぞ。

？

？

？

？

俺が島に上陸して1時間が経過した。

適当に歩き回って見たが受験者とは遭遇しなかった。

しかし、俺を追けている奴が2人いる。

1人は試験官、もう1人はおそらく俺のプレートがターゲットの受験者だろう。

俺は周りに他の人がいないことを確認すると、鞘にオーラを溜めて

いき、刀を抜くのと同時にオーラを斬撃として背後へ飛ばした。

『剣の風（ブレイドソニック）』

放出系の技なので特質系統の俺が使っても大した威力は出ないが、その分スピードを出すことに力を加えたためその速さは音速に匹敵する（かもしれない）だろう。

放たれた斬撃は低威力でも木々をスパツと斬り裂いていく。  
途中で人間の肉を斬る音がしたのでその場所へ向かうと384番のプレートをつけた受験者が右腕を押さえた状態でいた。

「ぐう…………ちくしょう、気づいてたのか」

「まあね。プレートをくれるなら命まではとらないよ」

「ちつ…………俺の負けだな。やるよ、プレート」

よし、まずは1つ。

とはいえこのプレートはクラピカのターゲットだからな。  
交渉材料といったところだろう。

「じゃあな。早く止血とかしろよ」

約束通り384番は殺さないであげる。

原作じゃあヒソカに殺されているのだから右腕1本で済んでラッキ  
ーだよな。



？

？

？

？

「むう……遅いなあ」

俺はあれから次の予定のために一旦スタート地点に戻っていた。  
日が暮れたらここで落ち合うようにあらかじめゴン達と決めておいた。

キルアには声かけなかったけどアイツは放っておいても楽にクリアするだろうしな。

30分ほど待つと、まずクラピカとレオリオがやって来た。  
どうやら組んで行動していたらしい。

「すまない。待たせてしまったな」

「大丈夫だよ。そんなに待ってない」

「ゴンはまだ来てねーのか？」

「ああ……まだ来てないぜ」

ちょうどその時だった。

森からボロボロになったゴンが出てきた。

「ごめん。遅くなっちゃった」

「おいおい、一体何があったんだ!？」

「うん……オレのターゲットの人、お爺さんだったけどスゴく強くて……」

「なっ……負けたのか？」

「ううん、ギリギリだったけど勝ったよ!」

よし……これでゴンはクリアが確定だな。

「そっだクラピカ、これやるよ」

「分かった。私はこの集めた2つのプレートでいいか？」

「OK！これでゴンとクラピカはクリア、俺もあと1枚だな」

予想以上に順調だな。

「後はムサシとレオリオだけだな。レオリオのターゲットのポンスについて何か知っていることはないか？」

「俺が知る限り、ポンスは薬を使いワナをはるタイプだ。ゴンの嗅覚なら難なく見つけれられる」

「本当か！よし、行くぜゴン！！」

再び森へと入って行くレオリオ達を見送る。  
さて、ここまで来ればあとは適当な奴からプレートを奪うだけだからな。

単独行動に移るとしようか。

？

？

？

？

単独行動を始めて3日が経った。

俺は円を使いたい衝動を必死になって抑えていた。

信じられないことにこの3日間、生きている人間とは一度も出会わなかったのだ。

円を使えば楽勝だが、もしヒソカに触れてしまったら取り返しがつかなくなる。

なんて事を自分の円が最大10mだということを忘れて考えているあたり、精神的にもヤバいかもしれない。

だがしかし、神は俺を見捨てていなかった。

突如、後頭部に何かが激突したのを感じる。

「…………痛エ。誰だか知らねーがイイ度胸だああああー!!」

と、ぶつかつた物を握りしめながら叫ぶ。

そして感じる違和感。

手の中のモノが丸い形をしていることに気づく。

「お…………おお?」

そこに握られているのは197番のプレート。  
キルアが受験者から奪い、適当に投げたプレートだということに思  
い至る。

「……………神様仏様キルア様」

このおかげで、ムサシも無事に四次試験をクリアした。

## 試験合格　そして救出へ

現在俺達は迎えに来た飛行船に再び乗り込んで最終試験の会場へ向かっているらしい。

受験者は各々が最終試験に向けて鋭意を養っているだろう。

なにせ次の試験の可否で今までの苦勞が無に帰すことになるかもしれないしな。

緊張も今までの試験の比じゃない。

そんな中、俺はまたもや後悔の嵐の渦中にいた。

なぜかという、ゴンのターゲットが原作で最終試験に残っていたポドロさんだったことをウツカリ忘れていた。

ポドロさんといえばキルアに殺される哀れな脇役。

つまり、代わりに俺が殺されてしまう可能性が無いこともないのではないか？

いや、俺もそんなことはない！と思いたいけどさあ。

何が起こるかなんて分かるわけないからね。

取りあえず今の内にキルアの好感度を上げておかねば――

『次は受験番号330番の方おこし下さい』

――しまった、面談のことを忘れていた。

さすがにコレをすっぱかす訳にはいかない。

くっ、結局また俺の運次第ということか！

……キルアが少しでも俺のことを友達だと思っていればいいけど。

？

？

？

？

結果的には、俺は殺されずに試験を合格したらしい。

らしい、と言うのは俺に最終試験の記憶は無いからだ。  
気付いたら既に合格者の講習会が終わろうとする所だった。  
覚えているのはゴンがハンゾーになぶられている途中まで。

あー……確か”僕”に代わってもらっていたんだっただな。  
あのままゴンへの仕打ちを見ていたらキレちゃって”オレ”が出てくるかもしれないからな。

実を言うと、俺は多重人格者だ。

”俺”の他にも3つの人格を頭の中に飼っている。

これは天然ではなく、俺の念能力で造り上げたものだ。

この能力——『鬼怒私落』——で造った人格は条件付きで知識の共有はできても記憶を共有することはできない。

故に、”俺”……「私」の人格以外はゴンのことを赤の他人としか思わないのだ。

だから最終試験の内容のほとんどを俺は覚えてないのだ。

だが、知識の共有はできるため、内容を知ろうと思えば知ることができる。

他人の記憶を文字だけの日記で見てるような感じと言えば分かりや



すいだろつか。

ただし、ムサシの元々の人格をベースに造られた「私」の人格……  
つまり「俺」のみが可能なことではあるが…。

今、”僕”…「落」の人格から手に入れた知識によると、不合格は  
やはりキルアだった。

誰も殺さないで試験途中に姿を消したらしい。

「ここにいる8名を新しくハンターとして認定いたします！」

ちょうど知識の読み取りを終えると同時に講習会も終了したようだ。  
そしてゴンがギラクトル（イルミ）にキルアの居場所を聞き出して  
いる。

もちろん、俺もゴン達の側へと向かう。

「あれ？キミもそうなの？」

「当たり前だ」

イルミの質問に対して毅然と言い返す。

ゴンは嬉しそうに、クラピカとレオリオは意外そうに見てくる。

……まあ”僕”の態度はキルアを見捨てたように見えたりもしたかな。  
いかな。

「……いいだろう。キルは自宅に戻っているはずだ。ククルーマウンテンの頂上にオレ達一族の棲み家がある」

？

？

？

？

キルアを救うため、ククルーマウンテンのあるパドキア共和国へと俺達は赴いた。  
聞き込みによるとゾルディック家の観光バスとやらがあるらしいの

でそれに乗リククルーマウンテンを目指す。  
ガイドの人が家族構成まで教えてくれるけど何で知っているんだろ？  
隠していないだけじゃ説明つかないよな。

そうしてゾルディック家の正門”試しの門”に着いた。

「ねエガイドさん。どうやって中に入るの？」

「あのねボウヤ。ここは殺し屋の隠れ家、中に入ると2度と生きて出られないの」

「ハン！ハッターだろ？」

ガイドの言葉にかませなオッサンが反論する。

「誰も見たことのない伝説の暗殺一族。ウワサだけが一人歩きしてるだけで実際は大したことがねエツてのがオチよ」

偉そうなことを言ってオッサン達は守衛から鍵を奪い門の横の方にある小さな扉から入って行く。

コイツらも頭悪いよなー、と思いながらもちやつかり俺も一緒に入る。

「え？……………ムサシ！？」

「おっ先イ————」

驚くゴンに手を振りながら、俺の姿は扉の中へと消えた。

オレは投げ捨てられて尻餅をついている守衛さんに駆け寄る。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。あーあまたミケがエサ以外の肉を食べちゃうよ」

「え？」

ミケ？ エサ？ 一体なんのことだろう？

そう思った時、さっき閉じたばかりの扉が開き始めた。

もう帰ってきたのかなと思っていたら、出てきたのは巨大な獣の手と2つの骨だけになった死体だった。

一瞬、ムサシなのかと思ったけど服を見て違うことが分かりホッとする。

「あれ？1つ足りないな。ミケは骨までは喰わないはずなんだけだなあ」

「当然だよ、おじさん。ムサシはとても強いから」

でも、勝手に私有地に入るのは良くないからね。  
オレ達はまず、守衛さんに話を聞いてもらおう。

？

？

？

？

うーわ、あのオッサン達一瞬で喰われちゃった。  
かくいう俺もミケちゃんから逃亡中なわけだけどね。

迂闊だったなあー。

絶でやり過ぎすつもりだったんだけどな。

絶を使っても二オイで追いかけているね、コリヤ。

こんなことならキルアにもマーキングしておけば良かった。  
いや、アイツにそんなスキはないか。

さて、後悔ばかりしていても仕方ない。

そろそろミケちゃんのおにごっこもお終いにしよう。

## 試験合格　そして救出へ（後書き）

オリ主の最後の能力を公開しました

我ながら扱い難い能力にしてしまったなあ

記憶のところに關しては「空の境界」の玄霧さんみたいな感じです

設定の方も更新しておきます

## 隠家侵入　そして空戦へ

はじめまして、僕の名前はムサシです。

”俺”と名前が被るというお方はムサシと呼んで下さい。

ちなみにCはCOOLのCです。

戯れ言はさておき、どうして僕が表に出ているかについて説明しておこうと思います。

”俺”に与えられた知識によると、ミケちゃんという番犬(?)を発でノックアウトさせた後、次々とゾルディック家の執事らしい黒服の人達が現れて襲いかかってきました。

僕は無能な他人格達と違って円を最大50mまで広げることができません。

なので”俺”と代わり、円を使って襲い来るゾルディック家執事達から逃げていました。

けれど、それが通用したのも最初の内だけでした。

いくら円を広げることができても全方位から来られては避けようがありません。



故に、僕は作戦を変更することにしました。

僕のもう1つの特性に操作・具現化能力の上昇があります。

”俺”では具現化した剣を相手に飛ばす程度の操作が限界ですが僕ならこんな風に、飛ばした剣に乗り空を飛行することもできます。

それでも時々下から放出系能力者や操作系能力者の攻撃が飛んで来るのですが、自動的に盾が具現化されて攻撃を防ぎます。

この盾は、1つしか具現化できないという『制約と誓約』のおかげで相当な堅さですから、”あの娘”の『対空砲花』クラスの攻撃でもない限り僕に攻撃が届くことはありません。

おや……………？

前方から何か飛んできますね。

あれは……………光の龍？

?  
?  
?  
?

ククルーマウンテンにあるゾルディック家の隠れ家より遙か彼方を見つめる1人の老人の姿があつた。

キルアの祖父、ゼノⅡゾルディックであつた。

「ふむ、殺つちまつたかのオ。一応キルの友達らしいから手加減したんじゃが」

先ほどムサシコの見た光の龍の正体は、ゼノがオーラを変化させて作つた『龍頭戯画』という念能力だつた。

変化系能力にも関わらず、ゼノの手を離れても威力が損なわれない辺りにゼノの実力が現れていると言えるだろう。

「ほお、どうやら防いだようじゃな。若いクセに中々やるようじゃのオ。どれ、もう少し遊んでやろうかの」

ゼノは、再びその手にオーラを集中させた。

「危なかった……ですね」

まさか僕の盾を突き破って来ますとは……。

さすがはゾルディック家。

相当な念能力の使い手がいるようですね。

これほどの威力にオーラ自体を飛ばしていることから具現化系の可能性は低いはず……放出系か強化系でしょうか？

おっと、思考する間もなく2撃目ですか。

しかも今度は3体同時。

1体でも僕の盾では防ぐことはできません。

防御がダメなら攻撃しかありませんね。

空中に古今東西を問わぬ多種多様な剣を具現化させます。

その数、108本。

「射きなさい」

僕の命令を受けた剣群が彼方の敵を目標に疾走します。

途中でいくつか龍と相殺されるが、こちらの方が圧倒的に量で勝っていますからね。

「さて……どうします?」

敵がどうやって僕の剣群を防ぐのか、楽しみですね。

「……………コレほどはのオ。キルの友達を侮ったわい。ワシも  
ちいとはっかし本気でいこうかの」

今まで以上のオーラを両手に込めて、一気に放つ。

現れたのは1匹の龍。  
されど、剣群との距離が100mを切った途端、龍は剣群を上回る数に分裂し、小龍となって剣群を迎撃した。

剣群を蹴散らした龍は、次の獲物を求めるかのようにムサシクに向けて一直線に飛来した。

「コレ……は……」

なんとという規格外。

放出した龍をあそこまで操るとは……放出系能力者でありながら操作系までも極めているというのですか!?

「くっ……仕方ないですね……」

僕の乗っている剣を唯一の逃げ場である真下……森へと進路方向を無理矢理変更させます。

急降下で森へ入り、森の中を縫うように飛び回ります。

「ふう……………さすがに森の中までは追って来ませんか。自動追尾ではないようですね」

龍が追って来ないことを確認してひと息つきます。  
もちろん執事対策に絶も欠かしません。

「……………一度”俺”と代わりましょう。彼なら何か敵の情報を持っているかもしれないですからね」

こうして最強の殺し屋との戦いは逃亡という結果に終わった。



## 隠家侵入　そして空戦へ（後書き）

ゼノの本当の系統は変化系ですけど

ムサシCには原作知識が与えられてないので色々勘違いしてます  
初見だったら放出系能力者だと思いますよね

円が苦手とか具現化の数が少ないという弱点をアツサリ無くしちゃ  
ってスミマセン

一応、クラピカの絶対時間みたいな限定的なものですけど

ちなみに剣に乗って飛行はシュートさんみたいな感じです

伏線ばく出したあの娘は次章で出します



再開誓い　そして離別へ（前書き）

すみません、ご都合主義になってます。

再開誓い　そして離別へ

数日経ってようやく俺はククルーマウンテンの麓までやって来ることができた。

「追っ手は……………いないな」

執事達はどうにか撒くことができたみたいだ。

それにしても、ゼノと闘りあうことになるとはな。  
まあ、本気で殺りにきたわけではないだろう。  
でなけりゃ生き残れたのは奇跡だ。

「取りあえず、入り口を探すか」

いつ追っ手が復活するか分からないからな。

？

？

？

？

あれから1日中入り口を探し続けて、ようやくそれらしき場所を見つけた。つけることができた。

隠れ家の入り口だから罠を警戒したのだが特にそういったモノは仕掛けられていないらしい。

ただ四角にくり抜かれた岩の道を進んで行く。

取りあえずはキルアと合うために独房を目指そう。

この国に来てまだ1週間ぐらいいいしか経っていないからキルアは拷問紛いを受けているはずだし。

聴覚を強化してムチの音のする方へ進んでいけば、いずれキルアの元へたどり着けるだろう。

そして、次の別れ道を右に曲がろうとした時だった。

突如に強大なオーラの持ち主を察知する。

これは……………円！！

「ちっ！ 不味いな」

いくら絶でオーラを閉じていても俺自身の存在は隠せない。  
つまり円に触れた時点で俺の居場所はバレてしまった。

「くう……………！！」

すぐにこの場を全力で離脱しようと考え、すぐに諦めた。

先ほどのオーラの持ち主が既に俺の目の前に来ていた。

「ようこそ、ゾルディック家へ。じゃが依頼ならちゃんと守衛を通してくれんどのオ」

ゼノ＝ゾルディック……………。

腰を低くし、右手を刀の柄に添えていつでも抜くことのできるようにして臨戦態勢をとる。

目の前の人間は、決して油断ならない怪物だ。

「お主の絶は見事なもんじゃわい。円で触れても、こうやって目前に来ても全く力量が計れん。じゃから闘り合うというなら、悪いが手を抜くことはできんぞ」

「.....」

どうする？

とてもじゃないが殺し屋のホームで殺り合って”今の”俺に勝ち目はまず無い。

「そこ、通してもらっても構わないかな？」

「ふむ、理由を聞かせてもらおうか」

「友達に、なりたい奴が居るんだよ」

俺は、正直に話すことを選んだ。

「ふむ、殺し屋の子供と友達になりたいとは変わった奴じゃの。良  
かろう、進め」

……おや？ 上手くいったみたいだな。

「ありがとうさん」

キッチンとお礼を言って横を通り過ぎて行く。  
ゼノがボソツと何か言った気がしたが聞き取ることはできなかった。

？

？

？

？

ムチの音を頼りに進んでいると、もう少しという所でムチの音が聞こえなくなった。

それでも最後に音のした方へと進むと、ムチを持って息を切らしている肥満体型の男と鉢合わせた。

キルアのもう1人の兄、ミルキィゾルディック。

「コフー、お前誰だよ？」

「えーと、ですね……」

迂闊だった。

コイツの存在をすっかり失念していた。

正直、見た目は強そうに見えないけど……。

仮にもゾルディック家の人間だから弱いはずがない。

できれば戦闘は避けたい所なのだが……。

「仕事の依頼の件で少々……」

「ああ、仕事ね。お前みたいなガキのはした金でウチが動いてくれるといいな」

嫌味なセリフを残してミルキは去って行った。

それにしても”ガキ”ですか。

そんなに歳は離れていないと思うんだけどなあ。

まあいいや。

それより早くキルアに会おう。

ミルキの出てきた部屋を覗いてみると、両腕を鎖で吊されながらもグッスリ寝ているキルアの姿があった。  
こんな状態でよく寝れるよなあ。

「おい、起きろー」

「なんだよ兄貴、疲れたから休むんじゃ――」

俺の姿を見たキルアが驚きで目を見張っていた。



「ムサシ………なのか？」

「イエス。お前の知っているムサシだよ。聞いてないのか？ ゴン達も来てるぜ」

「いや、聞いてはいたけどさ、ここまで来るとは思わねーよ」

「はっはっはっ、安心しろ。俺以外はまだ試しの門に挑戦しているところだろーよ」

「ふーん。で、何しに来たの？」

「別に、ただ会いに来ただけだよ」

「はあ？ それだけの為に殺し屋のアジトに侵入するとか、正気じゃないね」

「なんだよ、友達に会いに来るのがそんなにおかしいか？」

「……………」

「まあいいや。当分はここに居るからさ、いつでも声をかけてくれてもいいぜ」

「なっ！？ 帰れよ！ ここには毎日兄貴が来るんだぞ！！」

「大丈夫、大丈夫。ちゃんと（絶して）隠れるから」

尚も非難の目で見てくるキルアを無視してどこか隠れるのにイイス

ペースを探した。

それから2週間弱、俺は独房に居座りキルアとお互いのことをしゃべり合ったりした。

「やり方はともかくさ、キルアって家族に愛されてるよな」

「そうか？ そんなこと1度も思ったこと無いけど……。ムサシはどうなんだ？」

「俺か？ 俺は両親が居ないからな。妹が2人いるけど、ソッチとの仲は良好だぜ……。たぶん」

「親がいないってゴンみたいに旅に出てるのか？」

「いや、殺されたよ。……。俺の目の前でな」

「……………悪いな。イヤなこと聞いちゃった」

「気にするな。それより、キルアは今日ここから出られるんだよな」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ俺、先にゴン達のところに戻っとくな」

「そっか……………じゃあな。気をつけろよ」

「おう、また後でな！」

独房を出ると、最短でゴンの元へ向かう。

「ジャンプ、壱番」

？

？

？

？

その後、ちょうど執事室へ向かっていたゴン達と合流した。  
執事室に入った時は執事達から殺気のこもった視線を向けられたがスルーした。

原作通りにコインゲームをしたが、その人質に俺が使命されたのは、俺を捕まえられなかった八つ当たりだろか。

さらに、キルアが来るまで終始俺への視線から殺気が消えることは無かった……。

再び5人で集まることができたが、クラピカが自身の目的である幻影旅団を追うためにハンターとして雇い主を探すために、レオリオも医者になる勉強の為に故郷へと戻って行った。

---

9月1日、ヨークシンシティでの再開を誓って。

「あつという間に3人になっちゃったね。どーする?」

「どーするって特訓に決まってるだろう」

「え? 何の? あそばないの?」

「お前な――」

早速2人ではしゃいでいる所、悪い気がするけど…………。

「ゴン、キルア、少しいいか」

「どうしたの? ムサシ」

「俺も故郷に帰ろうと思ってね。家族にも会っておきたい」

「えー!!! そんなあ」

「ん、分かった。オレ達はその間にムサシよりかもずっと強くなってるからな!」

「おう! 楽しみにしてるぜ。――ジャンプ、貳番」

突然消えた俺に驚いているだろう2人の顔を見る間もなく、俺は故郷であるジャポンに跳んだ。

？

？

？

？

能力で跳んだ衝撃により真っ暗だった視界に、今度は真っ白な風景が広がった。

おかしいな。

式番は下の妹に（内緒で）マーキングしていたはず。

疑問を感じながらも目を凝らすと、白いのが湯気であることに気づ

き、さらに下の妹の貧相な裸体が見えた所で、ここが風呂だと理解する。

下の妹は髪を洗うのに目を瞑っているため、俺に気づいた様子はない。

視線を動かすと、湯船に浸かる上の妹と目が合った。

「あら、お兄さまじゃないですか」

慌てた様子のない呑気なあいさつをかましてきた。

まあ、兄妹だしな。

今さら裸の1つや2つくらいどうってことない……よな？

「姉ちゃんのぼせた？ 兄ちゃんがいる訳ないじゃん」

そう言つて下の妹は髪のパを流そうとする。

お湯が俺にもかかりそうだから避けようとして、初めて自分の身体が動かないことに気づいた。

慌ててなんとか動く眼球を湯船の妹へ向けると、黒い笑みを浮かべて右手にこの世のモノとは思えない色をした花が握られていた。

《裏切り者！》

俺が視線だけで訴えると、

《自業自得ですわ》

と、堕ちた天使のような笑みで返してきた。

やっぱり怒っておられるようだ。当然だな。

「あれ……………兄ちゃん？」

髪を流し終えたらしい下の妹が俺を茫然と見ている。

俺は全く動かない身体でなんとか笑おうとした（後の妹の供述によると超変質者のような顔になってたらしい）

「……………」

下の妹は顔を赤くして俯かせ、右手にオーラを集めていった。



《——ヤバい——！ 硬はシャレにならん——！》

「兄ちゃんの……………バカアアアアア——！」

俺は、冗談じゃなく生死をさまようことになった。

## 再開誓い そして離別へ（後書き）

この後1、2話くらいムサシの家族の話をしてヨークシンシティに入りたいと思います。

## オリキャラ設定

名前：ユキムラ

性別：女

出身：ジャポン

年齢：12歳

系統：特質系能力者

特技：家事

能力：占領役者

大演場

### 【能力解説】

スターマスター

？占領役者

特質系能力

非常に限定で未来が分かる能力

自分の危機や相手の攻撃を事前に察知できる

『制約と誓約』

詳細不明

ビッグステージ

？大演上

具現化系能力

詳細不明

【詳細】

ムサシの妹、コマチとは双子で次女。

けれど兄妹の中では1番しっかりしている

明るくて単純な性格なのだがなぜか特質系能力者

日常では器用だが戦闘になると途端に不器用になり武器を扱うことが全くできない為、戦闘スタイルは剣士ではなく拳士

兄のことは変態だと思っている

名前：コマチ

性別：女

出身：ジャポン

年齢：12歳

系統：具現化系能力者

特技：舞

能力：花麗なる理想郷

【能力解説】

？花麗なる理想郷（フラワーガーデン）

具現化系能力

花を中心とする植物を具現化させる

【詳細】

ムサシの妹、ユキムラとは双子で長女

落ち着いた性格、丁寧な言葉遣いに黒髪長髪な容姿とあわせて大和撫子のような少女

けれど、私生活のほとんどを妹に任せっきりで何もできないダメ人間ズボラなのでなく何をするにしても壊滅的に要領が悪い

兄のことは変態だと思っている

一家団樂　そして復讐へ（前書き）

文才のない私の作品ですがどうぞよろしくお願いします

## 一家団欒 そして復讐へ

現在、俺達は久しぶりに家族揃って食卓を囲んでいた。

……俺は罰として、ただ座って妹達の食事風景を見ているだけだな。

ちなみに、下の妹――ユキムラの渾身の一撃をモロにくらい重傷を負った俺であったが、上の妹――コマチの『花保護な愛』で治療してもらったことなんか事なきを得た。

しかし、ユキムラが特質系で良かった。

もしもゴンみたいな強化系だったら一発で昇天するところだったな。

たかが妹の裸を見ただけで殺されちゃあ割に合わねーよな。

「……なんか、もう一発殴ってやらないといけない気がする」

「止めなさい、ユキ。お兄さまも十分反省してますよ。ねえ、お兄さま？」

「……………ウン、ハンセイシテイルヨ」

相変わらずウチの家系は勘がするどい。

「……………それにしてもさ、いつの間に硬を覚えたんだ」

5年前に念の修行をしているのを見つかったから俺がハンター試験を受ける為に故郷を離れるまでの間、コイツらには四人行しか教えてなかったはずなんだけどな。

「へえゝあれ硬っていうんだ」

「……………知らないで使っていたのか」

「まあね。それより兄ちゃん、ごはん食べたら組み手しようよ!」

「組み手? 別にいいけど……………」

「やったー! やつとあたしの発を試せるよ!」

「発!? お前、発まで覚えたのか!」

「うん! 楽しみにしといてね兄ちゃん。ボッコボコにしてあげるから!」

「ユキ、死なない程度にしてあげなさい」

「……………お前ら、物騒だぞ」

覚えてたての能力なんかには負ける訳にはいかないだろ。



とはいえ、ユキムラは特質系能力者だから、どんな能力かは未知数なんだよなあ。

油断はしないようにしよう。

もしボロ負けなんてしてしまったら、兄としての尊厳が無くなってしまっからな。

？

？

？

？

「ルール無用の1本勝負、先に参ったと言った方の負けです。準備

はよろしいですか？」

「いつでもオツケーだよ！」

ユキムラが両拳をガチガチ鳴らしながら告げた。

……戦闘スタイル自体に変化はないようだな。

「お兄さまもよろしいですか？」

「ああ。万全だ」

「了解です。では、始めてください」

戦闘開始の合図と同時にユキムラは速攻で攻めてくる。  
今までのユキムラとの戦闘経験からそう読んでいた俺は、構えをとったまま動かないユキムラに少し驚いた。

戦闘スタイルは変わらなくても戦略は変わったようだ。  
いつまで経ってもユキムラから動く気配がしない。

「なら……こっちからいくぞ！」

わざと声に出すことでユキムラの反応を見てみたが、微動だにしなかった。

強化した脚力で一気に距離を詰めて、右上段から袈裟斬りに刀を振り下ろす。

ユキムラは半歩下がることで俺の太刀をギリギリでかわす。

ギリギリでかわしたのは、刀を振り切つてがら空きになっている俺の頭に攻撃を加えるためだろう。

だが、俺は素早く屈んで攻撃が当たらないようにし、さらに振り下ろした刀を勢いを殺さぬまま逆に斬りあげる。

2つの斬撃を一連の動作で行う連続攻撃——”燕返し”——

回避から攻撃に移ろうとしていた相手は返しの斬撃に反応することができない、必中の技。

——しかし、俺の刀は空を斬ることになった。

ユキムラが、初めから攻撃に移る気がなく回避だけに全力を注いでいたからだ。

——解せない。

兄妹だからある程度俺の技は知られているが、それはこの家で伝えられてきた二天一流の技だけだ。

”燕返し”は俺自身が編み出した技、それを初見で見切られたのは腑に落ちない。

「どうしたの兄ちゃん。どんどん来なよ！」

あの態度も気になる。

ユキムラは自分からガンガン攻めていくタイプだった。

………このことも、アイツの念能力に関係しているのかもしれないな。

俺はユキムラの念能力を確かめるために再びアイツに接近する。

その途中で『追爪する五つの印』を発動して、俺はユキムラの背後へ跳んだ。

もちろんこの能力について教えてはいない。

だからこれは完璧な不意打ちであり、反応できるはずがない。

だが、ユキムラの背後に跳んだ瞬間、俺の目の前にはユキムラの拳が迫っていた。

盾の自動防御が間に合ったおかげでなんとか防ぐことができた。

「意外と堅かったなあー。ぶっ壊せると思ったのに」

ユキムラはそう言って手をブラブラと振っている。

今の言葉で確信した。  
アイツの念能力は瞬間的な未来予知！

ユキムラの発言からすると、盾が具現化することが分かっていた。  
だが、これは有り得ない。

アイツには盾の具現化など見せたことはない上に、そもそも俺の系統は強化系だと教えているからだ。

未来予知なら初見の技を見切ったり知らないはずの能力による不意打ちにカウンターを合わせることができたのにも納得がいく。

そして、おそらくだがアイツが未来から得れる情報量は多くはない。盾の具現化が分かっていたのに、それを殴った結果を予知できていないのがその証拠だ。

とはいえ待ちの態度をとる未来予知能力者を迂闊に攻めたらカウンターをくらうだけだ。

ならば対抗策は1つ。

予知<sup>わか</sup>っていてもどうしようもない攻撃をするまで。

左足を前に。

刀を持つ右手を顔の横まで上げ。

左手は添えるだけ。

防御を捨て一撃必殺を必定とした攻撃特化の構え。

——”蜻蛉”。

オーラを振り上げた刀へと収束させる。

今から繰り出すのは、”蜻蛉”の構えからの『剣の風』。  
その速さは稲妻にも匹敵する。

神速不可避の一撃——”雲耀”——。

凝縮されたオーラに悲鳴を上げる刀を、今まさに振り下ろさんと——

「参りました——！！」

ユキムラの迅速かつ賢明な判断により、その刀が振り下ろされることはなかった。

？

？

？

？

組み手の後は3人で反省会をすることになった。

ユキムラの能力は俺の予想通りに未来予知だった。

制約は厳しいけど強力な能力には違いない。

俺の方もバレてしまった能力の詳細を話すことになった  
もちろん肝心なところは上手くはぐらかしておいた。

それから毎晩、俺は妹達に修行をつけてあげた。

ユキムラには流を教えコマチには具現化の指導をしてやった。

2人ともゴンやキルア程ではないにしろかなり才能があったので順調に成長した。

来年は2人ともハンター試験を受けるらしい。

なので戦闘技術だけでなく幅広い技術を教えることにした。

そうしてオークションまでの時間を潰していた時、近隣の村からあるウワサが聞こえるようになった。

そのウワサの内容は、全身に包帯を巻いた男が再び（・・・）現れ、村を襲い大人の住民と虐殺しているというもの。

10年前も同じようなことがあり、この村も襲われて俺の両親はソイツに殺された。

……俺は静かに、復讐の機会が訪れたことに歓喜した。



一家団樂　そして復讐へ（後書き）

タイトル詐欺にならないように

テコ入れで念能力より剣術に力を入れてみました

次回も戦闘です

拙い文章力ですが、少しでも満足していただけるように努力したい  
と思います

炎熱地獄　そして死闘は（前書き）

どうぞよろしくお願いします

## 炎熱地獄　そして死闘は

暗闇に包まれた山道を1人で歩く。

俺の村から山一つ越えた所にある村に向かうためだ。

予測が正しければ、そこに奴が――全身包帯の男が――現れるハズだった。

奴が村を襲う時は必ず夜であることも考えて、奴を決して逃がさないため、こうして夜に奴が襲撃する村へ向かっていた。

それでも、奴が予測通りに行動していなければ無駄足になる行為ではあった。

しかし、あることから奴が目的の村にいることを確信する。

――血の匂いだ。

既に麓の方から強烈な血の匂い、助けを呼ぶ悲鳴、狂喜に染まった笑い声が俺の元まで届いていた。

俺は直ぐに駆け出した。

暗闇で周りが見えないためアチコチにかすり傷ができる。

だが、その程度はまったく気にもならなかった。

そうして1分も経たずに村へ着く。

その瞬間、円を使わずとも強力な念能力がいることを察する。

俺は、やはりと思った。

俺の両親は常人としては最強の部類だったにも関わらず殺されたことから、奴は念能力だとずっと考えていた。

10年前は未熟だったために正確には分からなかったが、今ならア

ノ全身包帯男の強さがよく分かる。

おそらく上位のハンターと匹敵するレベルだろう。

それでも俺は臆することなくオーラを感じる方向へと行く。

そして、俺は長年待ち望んだ相手と対面した。

近くの街灯が、たった今握り潰したのであろう頭部の返り血で全身を被う白い包帯を血にそめる男を照らしていた。

その光景を見た俺の心は、怒りではなく喜びで満ちていた。おそらく、怖気のする笑みを顔に浮かべているだろう。

そして頭の片隅で2人の妹を置いてきて良かったと考える。

こんな復讐鬼をアイツらには見せたくはない。

そして、目の前の奴が口を開く。

「……………ガキには用はねーんだ。さっさとどこかに行きな」

俺をまったく相手にしない態度に生まれた怒りを、”コイツだけは俺が殺らなければならぬ”という思いで抑える。そして、努めて冷静に告げた。

「ガキじゃねえ。俺はプロハンターだ」

「ああん？ ハンターだと？」

奴は驚いたというよりは信じられないという反応をした。

「おつかしいなあ。賞金首にならねーようにわざわざこんな田舎の奴らを殺ってたのによオ」

……クズめ。

「ガキは殺らねー主義だが、ハンターとなったら別だ。悪イがデメーには死んでもらうぜ」

「やってみろよ、殺人鬼!!」

満月の下、凄絶なる死闘の幕が開けた。

?

?

?

?

両手に1本ずつ刀を具現化させる。  
今回はいつもの刀を持たずに来たからだ。

「ほう？ 具現化系の能力者か」

奴が戯れ言を吐いている内に本命の用意を済ませる。  
それは、奴の上空に具現化して浮かべている11本の刀剣。  
万が一に備えて隠も施されているそれらを落とす。  
『剣の雨』が、隙だらけの奴へと殺到する。

———  
殺った！！

その考えは一瞬で碎け散る。

刀剣は、奴に触れることなく溶けていった。  
俺は動揺を隠し、慌てずに全力で凝を行い、我が目を疑った。  
最初に凝で見た時には存在しなかったものが、奴を包み込んでいた。

「———  
炎だと！？」

そう、奴は巨大な炎を纏っていた。

「正解だぜ。よく見えたじゃねーか、隠には自信があつたんだぜ」

「信じられない……………」

生半可な凝では見抜けない隠で炎を見えなくしていたこと。

それはまだいい。

信じられないのは、念能力で炎を使うこと。

おそらく変化系能力でオーラを炎に変えているのだろうが、どんな生き方をすればそんなことが可能になるのか。

奴の容姿から推測できるのは……………。

「——その包帯の下は火傷か？」

「おお！ またまた正解だぜ！ 中々察しがいイじゃねえか！」

「……………」

「そんだけ賢けりゃー分かるよな？ テメーの剣は俺の『プロミネンススクラッド 劫火堅爛』  
には通用しねえ。つまりテメーに勝ち目が無エってことがよオ！！」

言葉が終わると同時に右腕を突き出され、

「火拳・紅蓮腕」

巨大な拳と化した炎が放たれた。

「くっ」

俺にできる限界の力で、最高硬度の盾を具現化する。

しかし、奴の炎の拳の前にあっさりと溶解し、まったく防御の役割を果たすことはなかった。

それでも目眩ましにはなり、炎の拳のから逃れることはできた。

だが、俺の精神に安堵が訪れはしなかった。

炎の拳の射線上のものはことごとく灰へと歸し、さらに背後の俺の越えてきた山は焦土と化していた。

変化系能力者にはありえない威力に、ただ茫然とその光景を眺めることしかできなかった

「テメーなら今ので気づいただろーが俺の本領は放出系だ。その気になればこんな村1つぐれえなら一撃で灰に変えてやれるんだぜ。とつとと諦めたらどうだ？」

さすがに奴の言うことが誇張なことぐらい分かるが、無視できない威力であることは先ほど証明された。

おそら掠るだけで、いや、余波の熱だけでも体が焼かれるかもしれない。



「……………なめんじゃねえよ」

それでも、10年前から決めていた。

”俺”が最初に殺す人間は、お前だと――。

「そーかい。仕方ねーな、オレの名前はシシオだ。冥土のみやげに  
持っていきな」

奴が炎を収束<sup>オーラ</sup>して変形させる。

その炎は、ハンマーのようなものに形成されていく。

「――火槌・火産霊神」

火神の鉄槌が、ムサシに向けて投擲される。

ムサシは避けようとせず、その場を動かない。

彼の知る所ではないが、例えば避けても『火槌・火産霊神』は着弾地点を中心に周囲へこめられた炎を爆散させる放出系として――むしろこちらの方が本命――の能力でもあり、なんにせよムサシは絶体絶命だった。

彼の右手から刀がこぼれ、地面に落ちて消える。  
端から見れば、もはや戦意喪失の証だった。

——左手にもう1本の刀が残されていることを除けば。

「奥義——”一之太刀”——」

摂氏3000度を超える温度の炎を、鋼の刀が切り裂いた。  
形状を保てなくなったことで炎が霧散<sup>オウラ</sup>していく。

もしこの炎が本物であったならば、ムサシに為す術はなかっただろう。

しかし、この炎はオーラによるもの。

『右手に剣を左手に盾を』に隠された”オーラを斬る力”の前では

紙切れ同然であつた。

「ちいつ、何しやがつた!!」

シシオの焦った怒鳴り声が響く。

ムサシは気にも留めずにゆっくりと駆け出した。

「くそつたれが!!」——火銃・焰霊」

毒づきながらもシシオは、新たに3つの炎弾を撃ち出した。

「奥義——”無明剣”——」

高速で放たれた”三段突き”により炎弾は散る。

そしてムサシは、駆ける勢いのままにシシオへと高く飛びかかった。空中へと飛び上がったムサシを前に、シシオも己の炎を極限まで高めていく。

お互いに次の一撃に全てをかける。

「くらえや！！」——火技・大文字！！！」

「——”金翅鳥王剣”——」

大の字の炎が放たれる。

途轍もないオーラがこめられていた。

それでも、ムサシの刀により一刀両断される。

ムサシは落下速度を利用して、炎を斬った勢いのまま、シシオの身体を斬り裂いた。

「が——っああああああ！！！」

断末魔の叫びを上げながら、シシオを自棄クソに炎を辺りに撒き散らして死んでいった。

当然、正面にいたムサシも左手が炎に焼かれていた。

自棄になって放たれた炎であつたため変化の精度が甘く、そこまで炎の温度が高くなかったのが救いだつた。

だが、焼かれた左手にも気づいてないかのようにムサシは心ここに在らずといった様子だつた。

「やった……………殺つたのか……………」

ボソリと言葉が紡がれる。

復讐を果たした彼から喜びは感じられることはなく、

「……………気持ち悪い」

あるのは、人を斬った感触への恐怖だけだった。

## 炎熱地獄　そして死闘は（後書き）

拙いバトルシーンをご覧いただいてありがとうございます。

さて、包帯男はオリキャラ、というかるる剣から容姿と名前と能力を拝借させていただいたキャラでした。

ポノレノフだと思った人はいますかね？

少し強くしすぎた『劫火堅爛』ですが、制約としては15分以上使うと自分の身体が発火するリスクとかあると思います。

シシオだけに。

放出系の能力がムサシの第一チート”オーラ斬り”と相性最悪だったのが運の尽きでした。

放出系能力者が少ないので比較は難しいですが、シシオは放出系能力はレイザー以上、変化系能力はG・I・終了時のキルアと同等以下といったところです。

## サヨナラ　そして再会へ（前書き）

今更ですが、ムサシの家は大きめの武家屋敷です。

## サヨナラ　そして再会へ

漆黒の帳が降りた空に浮かべた盾に乗り、死闘の舞台となった村を見下ろす。

村は勢いを衰えさせる様子を見せない炎によって、ぐっぐくと焼かれていた。

まるで業火に燃える地獄を俯瞰している気分だ。

### 念能力者の死後の怨みによる念の強大化

今ここで地獄を作り上げている原因。

それにより、シシオが死に際に放った炎は一向に衰えること知らず、村を燃やし続けていた。

おそらく助かった人間はおらず、村もそのまま灰燼と帰すであろう。

「……………」

今も炎に焼かれている人、既に炎で命を奪われてしまった人へ向けて、黙祷を捧げる。

——自分のせいで村の人々を死なせてしまったのではないだろうか。そんな気持ちで、俺の心に影を落としていた。

俺が戦いを挑まなければ、少なくとも子ども達の命だけは助かったかもしれない。



……アイツの言葉を信じるならば、だが。

……終わったことを後悔しても仕方がない。

そう思い込むことで、ひとまず自分の気持ちに無理矢理にも整理をつける。

「——ジャンプ、参番」

未だ顕現し続ける炎熱地獄を尻目にして、俺はたった2人の家族の元へと帰った。

？

？

？

？

既に夜明けも近いこの時間帯。

まだ幼い妹達が寝ている時間帯でもあるため、普通なら寝室へと跳ぶはずだったのだが、気づくと俺は庭に佇んでいた。

……まあ予想していた故の参番だったんだけどな。

なんてことを考えながら、屋敷の縁側に腰を下ろしてこちらを見つめる相手へとあいさつをする。

「ただいま」

「ええ。お帰りなさい……お兄さま……」

立ち上がって上品に姿勢を整え、コマチがあいさつを返してくる。

「いつから待っていたんだ？」

「お兄さまがこっそり家を出てからずっと……です」

「まいったな。バレないように気イ遣って出て行ったつもりだったんだけどな」

「お兄さまが私に隠し事なんて……100年早いです」

「フツ………違うない」

表情や感情の操作は得意なのだが、どうしてもこの妹だけには俺の嘘も秘匿も見破られてしまう。

コマチはさらに、静かに冷えきった空気を切り裂くように質問を繰

り出してくる。

「では、こんな夜更けにお兄さまは何処へいらっしゃっておられたのですか？」

「……夜道を散歩にな」

「そうですか……お兄さまはただの散歩で、お召し物を血に染められるのですね」

「……………」

うっかり自分の格好をわすれていた。

どう答えればいいか分からず、沈黙せざるを得なかった。

「……そういえば、この近辺で殺人鬼再来のウワサがありましたね」

先に沈黙を破ったのは、やはりコマチだった。  
しかもしっかりと核心を突いている。

「お兄さまは殺人鬼さんに会いに行ったんですね？」

「まあ……お前の言うとおりだよ」

「動機は……何ですか？」

「動機？」

「はい。正直、お兄さまは積極的に殺人鬼さんを退治するような正義気質の人間であるとは思えません。お兄さまは常に受け身姿勢の

ヘタレ変態野郎ですから」

「変態は余計だ！」

他は否定できないことが情けない。

というか、いくらなんでも俺の評価が低すぎるだろう。  
兄の威厳もへったくれもないではないか。

「……………いずれ、ユキも一緒のとき話すよ」

「……………大方の予測はついていきますけど……………。今は聞かないで  
あげます」

「ん、さんきゅ」

「……………けれど、お兄さまは他にも何か言わないといけないことが有  
るのではないですか？」

「……………まったく」

やっぱりコイツに隠し事はできねーな。

「……………夜明けには、また旅にでる」

「……………そう、ですか」

ほんの僅かながら声のトーンを落とすコマチに罪悪感を感じながら  
も告げる。

今日の日付は8月1日。

俺の目的を果たすには、今日がタイムリミットだった。

「ユキにも…よろしく言っといてくれ」

「はい……」

「お前がお姉ちゃんなんだからな。頼んだぜ」

そう言っつて、踵を返そうとした――

「――待って！」

――したところを、コマチの凜然とした声に呼び止められる。

「……………これを」

そう言っつて、コマチから一輪の花を渡される。

元々4枚の花弁から1枚が欠けてしまっている花だった。

「……………ありがとな」

ボンツと低い位置にある頭に手を置き、サラツと撫でる。

「それじゃ、行ってくる」

黎明に染まり始めた空を見上げ、今度こそ別れを告げた。

「……いつてらっしゃいませ」

背後からコマチの声を耳に入れながら、

「——ジャンプ、四番」

別れの呪言を紡いだ。

## 雇用面接　そして脱出へ（前書き）

ヨークシン編を書き終えるのが待ちきれなかったです。  
最低月1で更新していききたいと思います。

## 雇用面接　そして脱出へ

再び故郷を出た俺は、予めコンタクトを取っておいた仲介所に斡旋してもらい、ノストラード組の身辺警護雇用契約の面接会場へと赴いていた。

面接会場である館の呼び鈴を鳴らすと、おそらくこの館の使用人であろう老人が出てきた。

この使用人の案内に従って屋敷を進み、控え室へ到着した。老人に続いて俺も入室する。

控え室には、既に5人の契約候補者――正確には3人だが――が集まっていた。

どうやら俺はクラピカよりも前に来てしまったようだ。

それにしても、俺が部屋に入った瞬間から全員の視線が俺に集中しているのを感じる。

それぞれがどんな意図を持って俺に視線を向けているのかは知らないが、少なくとも好意的なものは感じられない。

俺は極力視線を無視して、ソファ―へと素早く座り込む。

「おい、ガキ」

いきなり声をかけてきたオッサンに対しても黙殺する。

俺をガキなんて呼ぶ奴と話す必要性はない。

まあ、ガキであることに違いはないが、明らかに見下されている感じがしたから、これでいい。

「チッ……………」



オッサン（確かバシヨウだったか？）は舌打ちをして、すぐに俺から興味を無くしたようだ。

何故ならバシヨウが舌打ちすると同時に、控え室のトビラが開いたからだ。

使用人の後ろから、金髪で右手の五指に鎖を装備し、独特な民族衣装を身に纏う少年と青年の間ぐらいの容姿の奴が入って来た。

—— クラピカだ。

クラピカはサツと部屋を見渡し、俺と目が合うと、僅かばかり動揺していた。

だが俺の方が特に反応しないようにしていたため、クラピカもすぐに動揺を押さえ込んで近くのイスに腰を下ろした。

全員が揃ったのだろう。

使用人がモニターのスイッチを入れる。

モニターに、女を侍らせてあたかもボスであるかのように男が映し出される。

男から雇用について、組の望むものを手に入れてくるように条件を出された。

使用人から条件を満たすものに関してのデータカードが配布される。周りの奴らと同じように、俺もデータカードをチェックしてみると、どれもこれも気分の悪くなるようなものばかりだ。

さすがは人体収集家といったところだろうか。  
これが年端もいかない娘の趣味であることがまた、傑作だ。

面接はこれで終了して、みな早速目的のものを手に入れて来るため外に出ようとする。が、

「？ 開かねーぜ」

控え室のトビラに鍵が掛けられていた。

『一つ伝え忘れたが……』強い』ことが雇用の最低条件だ。その館から無事出られるくらい』最低』な』

モニターの男の言葉と同時に、外側からトビラを剣で突き破り、黒装束の人間がなだれ込んで来た。

さらに黒装束は、剣だけでなく銃まで使って攻撃してきたが、クラピカの鎖によって防がれていた。

俺の方にも、剣を持った黒装束が3体襲いかかって来る。

この俺に剣で挑む………念能力とはいえイイ度胸だ。

俺は右腰にある本物の刀ではなく、左腰にある具現化しておいた刀を鞘ごと背中まで持っていていく。

「居合奥義———”離弦の太刀”———」

背後に回した刀を勢いよく引き抜いて、3体の黒装束をまとめて斬

り裂く。

ならば、と銃を持った3人の黒装束が一斉に発砲してくる。

「フ——ッ!!」

放たれた弾丸3発を全て、剣術の”矢返し”を応用させ、黒装束へとそのまま弾き返す。

自分の弾丸に撃ち抜かれた黒装束は、その正体がオーラを詰められた人間風船である故、あっさりと破裂する。

これで半分は仕留めた。

残りの黒装束も迅速に始末しようと考えていると、

「ヤツらを止める。3秒待つ」

既にクラピカが黒装束を操作していた能力者を捕らえていた。

さて、俺の実力を”潜入者”を通してノストラード組にアピールする目的は達成した。

アレだけ見せつけければ契約を嫌がる理由も無いだろう。

つまり、この館にこれ以上残っていても意味は無いな。

「ジャンプ、四番」

俺は他の奴らに見られないようにして一足先に館を脱出した。

s i d e - クラピカ -

「  
——ッ！！ 嘘！？」

「どうした？」

突然、私の横にいた小柄な男が何かに驚きだした。

「1人……この部屋から……いえ、館から居なくなっただわ」

「なんだと！？」

部屋にいる人数を確かめる。

他の皆も慌てて各々の存在を確認し始めた。

……確かに1人居なくなっている。

しかもそれは——

「確かだな。サムライ野郎がいねえな」

「サムライってなによ？」

「オレの国で剣を使う戦士だよ」

「それって……あの、銃弾を弾き返していたボウヤのことね。確

かにあの子の姿が見えないわね」

そう。

彼が……予期せぬ再会となったムサシが居なくなっていた。

まず、ここに彼が居たこと自体が驚きだが、さらには誰にも気づかれずに居なくなるとは……。

いや、今はそれよりも、この場で私が彼と知り合いだという情報を明かすべきかどうか……。

「そのサムライの子だけど、居なくなる直前に『ジャンプ、四番』と言っていたわ。何か分からないかしら？ ……特にあなた」

小柄な男が私を指差した。

「……………なぜ、私なのだ？」

「あなたの心音、居なくなった彼の話になった時、心音が不自然な鼓動をしていたわ。しかも、今のあなたは迷いの旋律を感じさせる。何か話すべきかどうかって思っていることがあるんじゃないかしら？」

……………ここまで見抜かれているとは……………。

「どうなんだ？ 知っているのか、知らねえのか？」

「……………彼は同期のハンター試験合格者だ。能力については何も知らない。しかし、それはさほど重要なことではないだろう。いま重要なのはもう1人の潜入者を見つけることだ」

「……………嘘は吐いてないわ」

「そうか。なら、言う通りに潜入者を見つけよう」

「……私が調べよう」

ムサシ……どうして君がここに居たんだ。

一体、何を考えているんだ……。

雇用面接　そして脱出へ（後書き）

批評お待ちしています。

蟻編、どう収束するのだろうか？

## 競売開催　そして襲撃へ（前書き）

今回と次回、キャラ&スキルのクロスがあります。  
名前と能力と容姿だけで、人物設定は全くの別物であることをご了承ください。



## 競売開催　そして襲撃へ

現在俺達は数台の車に分かれて、飛行場からヨークシンシティを指している。

俺の乗る車は運転席がバシヨウ、後尾座席がリーダーのダルツオルネとボスのネオン嬢、助手席が俺だ。

ボスの車に乗せてもらえるとは新人の中でも評価は高いようだ。

念の為に言っておくと、俺を含む5人の候補者は、無事にボディガードとして採用された。

「おい、ムサシ」

「何だ？」

隣りのバシヨウが声をかけてきた。

採用が決定した時にお互い簡単な自己紹介は済ましておいたので、名前と能力ぐらいは知られている……とは言っても、俺は『追爪する五つの印』しか能力は教えていない。

同じ仕事をする仲間とはいえ、俺にとっては一時的なものに過ぎない予定だからな。

そう易々と自分の手札を見せたりはしないし馴れ合いもしない。

だがバシヨウは同じ国の出身でもあり、かなり気が合う。

コイツとだけはそれなりに友好的関係を築いていた。

因みにクラピカとはまだしっかりと話していない。

「あの娘はよ……オレ達のボスは占い師。しかも、途轍もない凄腕だという話だ」

「ああ。偶然会得した念能力によるものらしいね。それにしても未来予知とは……さすがは特質系能力だな」

「おいおい、オメーがそれを言うのか？ オレに言わせりゃ、瞬間移動だってかなりレアな能力だぜ」

「その分、制約がメンド臭いんだよ」

俺はチラッと右手の爪を見る。

今は人差し指と中指にだけ数字が刻まれていた。

「ま、そんなことより俺達はしっかりとボスを守って競売を成功させることだけを考えなきゃね」

「そんなに心配することはねーぜ。オレは何度かこういった仕事をこなしてきたが、大抵は何事もなく終ったからな」

「何事もなく………ね」

後部座席へと振り返ってみる。

リーダーであるダルツオルネが、ネオン嬢の占いを見て険しい顔をしている。

やはり、変わることなく幻影旅団の襲撃はあるみたいだな。

……………気を引き締めないとな。

今から俺は、自ら死地へと赴くのだから。

？

？

？

？

## ヨークシンシティのとあるホテル

俺達は今後の護衛団の方針についてのミーティングを行っていた。本来ならば、競売に参加するボス――ネオンノストロード――の護衛と競売の監視に分かれる手筈だった。

しかし俺とリーダーのみが知ることだが、ネオン嬢の能力で競売への参加が命の危険に繋がるという内容の予言が為されたため、急遽予定を変更し、競売に参加する組とボスをホテルで護衛する組に分けることとなった。

組み分けはこうだ。

――ネオン護衛

ダルツオルネ、スクワラ、イワレンコフ

――競売担当

ヴェーゼ、シャッチモーノ、俺

――正面口側監視

クラピカ、センリツ

――裏口側監視

バシヨウ、リンセン

俺は競売担当となった。

競売の知識など無い俺が選ばれるとは……。

単純に評価されているのか、捨て駒にされているのか。

原作の展開的には後者の可能性は割と高い。

まあ死ぬ気は毛頭無いけどな。

さて、競売へ向かう前に1つだけやって於かなければ……

「クラピカ」

「……ムサシか」

俺を避けるようにしていたクラピカに、敢えて自分から話し掛ける。

「なぜ俺を避けるか知らないが、どんな事があるうと俺とお前は仲間だ。……もちろんゴン達もだ」

「……」

「だから、あまり何でも1人で抱え込もうとするなよ？」

「……ああ」

俺の伝えたかったことは全て言った。  
クラピカなら気づいてくれるだろう。

本当に大切なものが何であるかという事に。

## 地下競売会場

豪華な部屋に、黒のスーツを着た厳つい面構えの男の群衆がひしめいていた。

まさに有象無象の集まりと言ったところだろうか。

正直、かなり自分という存在が場違いに感じられる。

「なんだい、坊や。緊張しているのかしら？」

「……別に。ヴェーゼさんこそ、周りが男だらけで内心ビクついて  
いるんじゃないの？」

「あら、そんなこと無いわ。余裕よ」

ヴェーゼさんとちょっとした軽口を交わす。

緊張気味の俺に気を使ってくれたのだろう。

さすがは大人の女性だ。

……性格に危ない一面が有るけど。

—— そんな、少し、心に安心を覚えた時だった。

「『おや？』『どうしてこんな所に子供がいるのかな？』」

俺の全神経を震わせるような寒気を発させる声が聞こえた。

バツと後ろへと向き直ると、俺以上に場違いな、黒の学生服に身を  
包む少年がいた。

見た目は俺よりも2、3年上といったところだろうか。

「『僕に言えた事じゃないけど』『ここは子供が来るような所じゃ  
無いと思うんだけどな』」

コイツの言葉が耳に入る度に、頭の中で警告音がけたたましく鳴り  
響く。

俺は今すぐこの場から全力で離脱したい衝動に駆られる。

—— コイツと関わると何もかもがダメになってしまう。

そんな予感がした。

「……ノストラード組に何か用でもあるのか？」

俺を庇うようにシャツチモーノさんが前に出てた。

どうやらコイツのおぞましいオーラは俺にだけ向けられているらしく、隣りの2人は何も感じていなかったようだ。

しかし俺の前に立ったシャツチモーノさんは、その瞬間、サッと顔色を青くし、僅かに身体を震わせていた。

「『うゝん』『組じゃなくてこの子個人に興味があつただけ』『何かお話できる様子じゃないみたいだし』『今回は"ツキ"が無かったみたいだね』」

そう言つて学生服の少年はクルリと身体を反転させた。

「『それじゃあ』『"ツキ"が合つたらまた会おう』」

不穏な言葉を残し、少年は去つていった。

同時に、緊張で固まっていた身体が一気に弛緩する。

そのまま座り込んだりしない様に、膝に力を入れてなんとか立った姿勢を維持する。

初めて感じるオーラだった。

強大さだけなら少し前に戦ったシシオに遠く及ばない。

精々中堅ハンターと同じ程度だろう。

だが、殺人鬼であったシシオをも遥かに上回る程に、不気味で禍々しいオーラだった。

「ちょっと。どうしたのよ2人とも」

「いや……何でもない。大丈夫か？ ムサシ」

俺より早く回復したシャツチモーノさんが心配そうに声をかけてくる。

「……大丈夫です。それより、もうすぐで競売が始まってしまいま  
すから」

まだ心に残る不安と恐怖を押し殺し、今は競売へと集中する様にした。

それから数分が経ち、競売の開始時刻となった。  
ざわざわとした空気が忽然と静寂に移り変わる。  
そして、舞台に巨軀と小柄のミスマツチな組み合わせである2人の



男が出て来た。

……いつでも能力を使えるように、精神をベストな状態へと持っていく、それを維持する。

「皆様、ようこそお集まりいただきました」

ただ只管、絶対堅固の盾をイメージする。

「それでは、堅苦しいあいさつはぬきにして――」

……来る！

「――くたばるといいね」

宣告と同時に、巨躯の男の十指から連続で念弾が放たれる。集まっていたマフィアの人間は、急な攻撃に対応できずに次々と撃ち抜かれていく。

「オレの背後に伏せろ！――」

『縁の下の11人』  
イレブンブラックチルドレン「！！！」

シャッチモーノさんが念を込めた風船黒子でガードを試みる。

だがその行為が無意味であることを知っている俺は、第2の防御として『右手に剣を左手に盾を（ナイト・オブ・オーナー）』を発動させ、最大限強化を施した盾を具現化させる。

具現化した盾によって、『縁の下の11人』をあっさり貫通して俺達に襲いかかる念弾の嵐は全て防ぎきった。

シャッチモーノとヴェーゼからは何が起きているのか理解出来ていないだろう。

一応、俺の能力は秘密にしているので、盾は隠によって見えない状態にしているからだ。

そして、弾幕が止んだ。

俺達は死体に紛れ込むことで姿を隠していた。  
だがバレるのも時間の問題だろう。

「シャッチモーノさん、ヴェーゼさん、俺が合図をしたら急いで逃げて下さい！」

「……お前はどうするつもりだ？」

「時間を稼いだ後、合流します。今はこの状況を外に知らせることが最優先です。……俺には瞬間移動があるから大丈夫ですよ」

俺の言葉に2人は無言で頷く。

……後は逃げ出すタイミングだ。

シズクが死体を一掃した時、俺が奇襲を仕掛けて旅団の虚を突き、その隙に2人には脱出してもらおう。

「この部屋中の散乱した死体とその血・肉片、および死人の所持品全てを吸い取れ………ついでに椅子も」

——よし！

「今だ……！」

俺は前に、2人は後ろの出口へと駆ける。

「ハアアア………！」

先手必勝とばかりに、2本の刀を両の手に創造し、全速力で目標へと疾駆する。

——この時、俺は失念してしまっていた。

たった1つの計算外が存在していたことを——

## 競売開催　そして襲撃へ（後書き）

めだかボックスから負完全のあの人が出ました。

一応、マイナス組は全員出すつもりです。

元のチート能力をハンター世界で矛盾等が無いように上手く設定し直していきたいと思います。

バショウの口調は、自分には表現できなかったです（悲）。

## 霜月の死　そして新生へ（前書き）

お気に入り件数が300件を越えていました。

まだまだ至らない自分の作品を読んで下さってありがとうございます。  
す。

どうかこれからもよろしくお願いします。

## 霜月の死　そして新生へ

満天に星々が散りばめられている夜空を、1機の気球がふわふわと、とある集団を乗せて飛行していた。

その集団の名は、

幻影旅団。

熟練ハンターでさえ迂闊に手を出せない、団員全てがA級賞金首の超極悪盗賊団である。

そんな彼らこそが、世界中の闇の住人であるマフィア達によって仕切られている地下競売に急襲を仕掛け、宝を全て奪い尽くそうとした者共だ。

しかし、彼らは困惑している。

何故なら、彼らが盗もうとしていた競売品の全てを、自分達よりも先に持ち出されてしまった。

つまり、彼ら……幻影旅団の作戦が失敗してしまったのだ。それどころか、手痛い仕打ちを受けてしまうハメとなった。

「フエイタン、大丈夫？」

無表情かつ、あまり心配そうではない声音で問うているのは、メガネを掛けた黒髪の少女――シズクである。

ちなみに、本当に心配していないのではなく、単に表情や感情の起伏が現れにくい性格なだけだ。

「痛みはないよ。けど、全く問題ない訳ではないね」

答えたのはフェイタンと呼ばれた、小柄な体格ながらも眼光を鋭く光らせている黒マンツの男だ。

「オーラ量の上限が減てるし、発が使えなくなてるね。十中八九、これの仕業に違いないね」

そう言つてフェイタンが示したのは、彼の身体のだ真ん中に突き刺さっている1本の螺子であつた。

「くつくくく、情けねエなあフェイタン」

「ノブナガの言うとおりだ。そんな急所に敵の攻撃を受けるなんて、お前らしくも無エ」

そんな彼を、旅団の特攻隊員である強化系コンビのウボオーギンとノブナガが揶揄する。

2人共強化系らしい直情的な性格をしている。

「当たり前ね。これは攻撃をくらたワケでないよ。恐らく私だけが何らかの条件をクリアしてしまたね」

ムツとした様子でフェイタンは反論する。

確かに地下競売の行われる予定だった部屋に居た3人の中で、誰も直接攻撃を受けてはいないにも関わらず、フェイタンだけがこの状態に陥ってしまったのだ。

しかも、現状ではこの螺子を抜く手段を、彼らは持ち合わせていなかった。

「何にしても……あの螺子野郎はブチ殺し確定ね」

ただでさえ鋭い眼差しをさらに細めながら、恨みと殺意の籠もった声でそう呟いた。

？

？

？

？

そんな幻影旅団の乗る気球を追う数多くのマフィア達の中に、クラピカの乗るノストロード組の自動車の姿があった。  
彼らもまた、幻影旅団を捕まえて褒美を得ようと企んでいるのである。



そんな中、クラピカは全く別のことへと思考を回していた。  
競売に参加していたムサシの行方と安否についてだ。

クラピカ達が異変に気づき、競売会場へと押し掛けた時には既に何百人といた競売参加者と競売品である宝は忽然と姿を消し、戦闘があつたことを証拠付ける傷跡のみが残されていたのだった。

そして、ムサシや他の2人からも連絡が入らない様な現状では、彼らが無事である見込みはほとんど無かった。

競売の襲撃犯が念の使い手であり、その能力で競売の参加者を丸ごと連れ去っているならまだ希望はある。

だが、死体ごと消し去るような能力だった場合は

「……………っ」

脳裏に浮かんだ最悪な想像を振り払う。

ムサシはそう簡単に死んでしまう様な奴ではない。

クラピカはそう信じて、ただただムサシの……掛け替えのない友人の無事を祈り続けた。

?  
?  
?  
?

時を同じく、ヨークシンシティの一角。

ノストラード組の幽霊会社ビルの前に1人の男が佇んでいた。

ムサシである。

彼は、簡潔には説明し難い道程の果てにこの建物へとたどり着いたのであった。

「ふう……取り敢えず、ボスに連絡しとこうか」

契約した時に支給された携帯電話を取り出そうと、ポケットをまさぐってみたが、目的の物を探し当てることはできなかった。おそらく先の騒動で紛失してしまったのだろう。

「……参つたな」

やることも無く、手持ち無沙汰になったムサシの思考は、自然と地下競売会場で起きたイレギュラーな事態へと馳せられた。

……

3人の旅団に真つ直ぐに突っ込んでいたムサシは、己の直感が知らせるがままに、直進していた身体に制動を利かせて元の位置へと戻るように、全力で後方へ跳んだ。

その反射に近い行動は功を奏し、天井を貫いて霰の如く降り注ぐ螺子の弾丸に巻き込まれることを回避した。

ちょうど螺子の雨の中心地に居た旅団3人は、それぞれ念弾や具現化した掃除機、念で強化した素手で対応していた。

そんな、不測の事態に戸惑っていたムサシに、一度聞いたら忘れない、あの声が囁かれた。

「『やつ!』 さつき振りだね』」

あの不吉なオーラを発する少年が、あるうことが自分の肩に手を置き耳元で囁いている。

そんな状況に、ムサシは思わず漏れそうになった悲鳴を慌てて飲み込んだ。

「『こらこら』 今は怖がっている場合じゃないでしょ』 早くここを脱出しなくちゃ!』」

そう言って不吉な少年は、右手を振り上げる。

これから一体この少年が何をするつもりか予測の付かないムサシは、緊張から身を堅くする。

そして、少年は宣言した。

「『よろしく!』 シブキちゃん!』」

まさかの他力本願であつた。

「任せな大将!!」

上の階より、1人の少女らしき人物が、ムサシ達の側へと降り立った。

「ブチ壊れる！」

『ベインベインター  
痛絵無悲』

「!!」

競売会場の床に亀裂が走る。

そして床は完全に崩壊して、ムサシ達は下階へと落下を始めた。

「『ナイスだぜ!』『シブキちゃん』」

「どー致しまして」

「『それじゃあ』『ここから脱出しようか』」

「脱出つて! 何処からだよ!？」

あまりのムチャクチャ振りにムサシは堪えきれずに叫ぶ。

「『心配ないよ』『こんな事もあるつかと』『地下に抜け道を掘つておいたからさ』」

「……」

少年の白々しさに、ムサシは閉口を禁じ得なかった。

.....

そして、少年　クマガワという名らしい　に従って地下の

抜け道より脱出し、彼らと『また会おうね』と言って（こちらは断固拒否だ）別れ、ここへと至る。

道中、何故あんな事をしたのか聞いてみたりもした。

「『それはね』『あの怖い人達に用があつたのさ』『幻影旅団つて  
いう怖い集団なんだけどね』『ちよつと暴れ過ぎだから』『さしず  
め警告つて所かな』『君も』『危ないことにはあまり首を突っ込む  
なよ』」

と言っていた。

警告、か。

.....マフィアが陰獣とは別に雇つたのだろうか？

取り敢えず原作からのイレギュラーとして頭の隅には置いておくでしょう。

そうやって過去を回想していると、前方よりノストラード組の車がやって来た。

車から全員が降りるのを待ってから、俺も出て行く。

俺の姿を確認して、みんな驚いていた。

「リーダー、ムサシです。只今帰還しました」

「ムサシか！？ 他の2人はどうした？」

「………… おそらく、死亡したと思います」

俺の言葉を聞いたダルツオルネは、一瞬だけ顔を曇らせたが、直ぐに表情を戻して告げた。

「報告ご苦労だ。それより、コイツを運ぶのを手伝って欲しい」

ダルツオルネは、鎖を巻き付けられた大男      ウボオーギンを指さす。

「コイツは？」

「競売会場の襲撃犯だ」

「…………… そうですね」

知っているが、一応聞いておく。

そして、さり気なくウボオーギンの首へと手を伸ばし、触れる。

「殺すなよ。これから拷問するんだからな」

「……了解です」

さすがに目を付けられたので、手を引っ込める。

ふと、視線を感じたので振り向くと、クラピカが俺を見つめていた。

自分の復讐に巻き込まないように距離を置いていながらも、心配していたことが目から読み取れた。

俺も、心配するなと視線で返し、早速作業へと移った。

拷問の結果、分かったことは幻影旅団は競売品を盗んでいないということだけだった。

ただ、シャッチモーノとヴェーゼの分はクラピカだけでなく俺も殴らせてもらった。

見張りに付くリーダー以外は、それぞれ休みを取っていた。



俺は、メールを見てビルを出ようとしていたクラピカに声をかける。

「…………行くのか？」

「ああ、私は行く。ムサシ、君はこれ以上私に関わりうとするな。次は、死ぬぞ」

「……………」

無言を肯定と受け取ったのか、クラピカは1人で出て行ってしまった。

…………俺には、ゴンのように言葉で人の心を動かすことは難しいようだ。

そして、数刻が経った時。

「くそオオオオオーオーオーオー!!」

野太い、野獣のような叫び声が轟いた。

「今のは!?!」

「おそらく拘束していた旅団だわ！」

「自力で解いたのか！？ ガスも使っていたのに……」

「落ち着け。奴が拘束を脱したのは確実だろう。俺達は一刻も早くここを逃げ出すべきだ」

慌てている仲間達に落ち着きを促し、逃亡を提案する。

「そうね。もしかしたら仲間が助けに来たのかもしれないわ。心音が複数ある。……コミュニティーの人間かと思っていたんだけど」

「今は気にするな。早く逃げるぞ」

俺達は旅団にバレないようにビルを脱出し、車で移動を開始した。

そうして俺達が逃げ落ちたのは、ネオン嬢の泊まっているホテルだった。

ネオン嬢が泊まっている関係上、警備体制はここが最も整っていたからだ。

そして、まずはネオン嬢を通して、彼女の父親であり組の首領でもあるノストラード氏へと指示をいただくことになった。  
その代表者にはクラピカが選ばれた。

ノストラード氏の指示から、ネオン嬢を守る方向で方針は固まった。  
もし旅団がプロハンターサイトを使う可能性を考慮して、ボスであるネオン嬢の部屋を移すこととなった。

クラピカを1人残して。

それから少しして、クラピカと巨大なオーラの持ち主がホテルから出て行くのを感じた。

「大丈夫かしら。クラピカ……」

センリツが心の底から心音そうに呟く。

「正気じゃねえよ。あんな化物を1人で迎え撃つなんて」

「ああ……無謀なことだ」

他の仲間達からも、口々に後ろ向きなことばかりしか言葉に出てこなかった。

「……そんな事はない。クラピカは勝算のない戦いをするような奴じゃないさ」

ムサシは、少しでもみんなが前向きになれるように言葉をかける。

そんなムサシに、センリツは疑惑を感じていた。

何故なら。

彼の心音から感じられるのが

達成感だったからだ。

？

？

？

？

人気が感じられない荒野。

とある復讐者と戦闘狂の戦いが行われた場所である。

結果は、復讐者が勝利し、仲間の情報を最後まで守り抜いた戦闘狂の死で戦いは終幕した。

そしてこの場には、復讐者の慈悲によって地に埋められた戦闘狂の死体があるのみ  
のはずであった。

突如、地面が爆発した。

巻き上がる砂煙の中から、人影が姿を現す。

死んだはずのウボオーギンであった。

「  
ッ……………ああ」

まるで深い眠りから覚めたかのように呻きをあげる。

「フウ、……………これがオレの身体か……………」

生まれて初めてこの身体を動かすかのように、拳を開いたり閉じたり、肩をぐるぐる回してみたりする。

「……………悪くない」

一言、感想を呟く。

そして、彼は人気のない荒野の大地へ第一歩を踏みしめた。

## 霜月の死　そして新生へ（後書き）

最後のあれは前の主人公設定を見ていた方には想像がつくかも知れませんが、一応以前とはかなり別物になっています。

過負荷の能力の詳細は作中で明かすか、手っ取り早く設定をあげるのとどちらがいいでしょうか？

追伸

F a t e / z e r o の P V 見ていたら以前書いた型月の小説の前日譚を書きたくなってきました。

ハンター優先だけれど、もしかしたら書くかも。

## オリキャラ紹介（前書き）

過負荷4人組のプロフィールです。

所々はまだ不明の状態になっています。

物語の進行をお待ちください。



## オリキャラ紹介

名前：クマガワ

性別：男

出身：流星街

年齢：18歳

系統：特質系能力者

能力：螺旋乖弾

却本作り

### 【能力詳細】

ピンバレット

？螺旋乖弾

具現化系能力

螺子を具現化する能力。

かなり頑丈かつ巨大なものを具現化できる。

具現化される螺子は全て＋螺子。

他に特別な効果はない。

？却本作り（ブツクメイカー）

特質系能力

螺旋乖弾で具現化した螺子に触れた相手に発動。

対象の胸に突き刺さった状態で－螺子が具現化される。

却本作りを受けた者は、発が封じられ、オーラ量が常にクマガワと同じになり、念の系統による威力・精度・修得度が特質系能力者と

同等になる。

名前：シブキ

性別：女

出身：流星街

年齢：16歳

系統：特質系能力者

能力：彩色兼美

痛絵無悲

【詳細】

オーラペイント

？彩色兼備

変化系能力

自分のオーラの色を変えることができる。

赤・青・黄・緑・白・黒・金・銀・銅の9色まで。

ペインペインター

？痛絵無悲

特質系能力

自分のオーラに触れている物にダメージを与える。

ダメージの種類はランダムで、ダメージの威力は対象の身に付けて

いる色と自分のオーラの色の比率によって上下する。

名前：ガガマル

性別：男

出身：流星街

年齢：17歳

系統：不明

能力：不明

【能力解説】  
不明

名前：ムカエ

性別：女

出身：流星街

年齢：15歳

系統：変化系能力者

能力：荒廃した花

【能力解説】

？荒廃した花（ラフレシア）

変化系能力

凝によって両手にオーラを集中させた状態で触れた物体を腐らせる能力。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2698v/>

---

サムライHUNTER

2011年9月28日06時44分発行